主幹◇麻生路郎

川柳雜誌

六月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和三年六月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌 第五卷 第六號

川柳雜誌社發行

▼六月例會

▼日時　六月二日午後七時

▼場所　南區日本橋一丁目交叉點北の辻東入　日本橋倶樂部

▼兼題　「重役」三句

▼會費　三十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

暑中見舞の廣告を募る

▽奮って申込まれたし△

柳友交誼のため左の便法を設く。

▼一口　金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます。

▽申込期限　七月十日迄【八月號に掲載】

大阪市住吉區杭全町六〇三

事務所　川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替を御利用の上、「前金」に願ひます。(三錢以下の切手代用でも差支へありません)

川柳雜誌　第五卷第六號　目次

感想・評論

春の日曠野抄　前田雀郎

女戒さんの事ども　蛭子省二

往診と來診　岩本素人

雅號に就いて　早坂北仙

研究・其他

時代川柳大觀異見(二)　西原柳雨

西原柳雨氏へ　木村半文錢

川柳の本質(六)　田中辰二

川柳人の一生(四)　路郎評　柴舟畵

漫畵　路郎、紋太、春三　山雨樓、松郎

月評　酒井駒人

平塚情調　檜山千代二

叡山から疏水へ　西村三笑

募集句

馬　森東魚選

貰ひ子　佐々木三福選

手摺　福田山雨樓　共選　松丘町二

六厘坊忌　橋本二柳子記

川柳家戸籍調　安井ひろし

各地柳壇　柴谷紫舟

(表紙)

題字　小出檜重

編輯後記　革郎生

創作

川柳塔

岩本素人　松盛琴人

太田朝陽　三好革郎

庄萬よし　西本三笑

横田眠聲　岩崎柳路

高見柳骨　矢田右大臣

酒井駒人　橋本二柳子

◇

松丘町二　楊井二南

桑原京郎　水谷鮎美

島田翠峰　中野柳陽

中澤濁水　兼重白鷗

猪野燕柳　安西杏三

水田黃彩　中島鐵州

朝田新水　越村加香

中見光路　森田笑太郎

粒々集

長崎柳秀　伊藤彦造

塚崎松郎　蛭子省二

近作柳樽　諸家

近作柳樽

路郎選

孕んだかそうかと云つて共稼ぎ　大阪　石竹
妻としていつそおなかの子と死のう　同　同
口答へ本當にさして下さるか　同　同
出てゆけば誰かゞ止めるかと思ひ　同　同
もう嘘もつけず一度はつれてゆく　同　同
ゆけそうなものだがそれが理屈でな　同　同
鐘が鳴るからすの列のはるかなり　大阪　露斗
四十を働きに出るおろかしさ　同　同
養子只言葉すくなによく動き　同　同
其の仲に次男の理想だけちがい　同　同
だんぱつをしてつゝがなし廿一　同　同
生活るため引く荷車の音がする　同　同
恐ろしや動きのとれぬ試驗管　鳥取　穂波子
棚に物上げるに老いた母を見る　同　同
兄弟を敵にしたは金のこと　同　同
骨折つて呉れる親類金がなし　同　同
人のこと默つてるようこの夕　蠻ヶ池　瘦郎
半分の佛に春の空青し　同　同

人を送る（二句）

美しい小鳥逃がした心持ち　同
咲いた花摘まるゝ時に摘まれさけ　同
つゝましうあればある身をモデル臺　大阪　多喜女
心に秘めて死んで行つたか　同
女氣の今は忘れむすべもなく　同
目立たぬやうに惚れてゐるのに　同
臨終へ百合は變らず咲いて居る　同　善導寺志
目さむれば南無阿彌陀の母の聲　同
面會に來る度妻の寢れよう　同
正月の音の時計もかゝつてる　神戸　竹木

思ひ出（二句）

うれしさは山もむかへるかたちにて　同
蜜柑から子供は夢をひろげたり　同　魚崎　亂晩
夢に風起り文字なき原稿紙　同
人類史酒はいづこへ流れ行く　同
大阪市バスにて戀を急ぐ身の　同
山遠く霞みステッキ輕いこと　同　德島　休歩
殺人も時に認める心もち　同
子のための淺い心も起るなり　同
すりきれた絨氈ほどの役廻り　同　長春　北公
金だけですませぬことに念をおし　同
三度目のマッチ話の間をねらひ　同
毀われたる物の姿で子は產れ　同　大阪　冷笑

金の前ごうにでもなるあさましさ　同
手をついておやまる嫁でありながら　同
盗電の下で仲人謠つて居　神戸　東洋鬼
親の死は落語を聞いて居つた時　同
立食が出來る身分を去らんさす　同　風柳坊
暫くは待つ氣でコーヒ二盃のみ　大阪
幸福のやうに見ゐるも他人ゆへ　同
君と僕酒であかした頃もあり　同
けちんぼの癖に夫婦仲のよく　同
沈着いてゐれば電車も來るものを　螢ヶ池　光哉
行屆く車掌新米らしいなり　同
春の宵それからそれと若くなり　別府　晃卓
戀したと思へぬ我を見つけたり　同
手土産の無心斷はり兼ねて居る　同
影にまで春の色ごりふくんで居　池田　白蝶
別莊が子供の遊び場所へ建ち　同
病む母に誘惑の手を拂ひかね　同
無抵抗主義に不覺の涙が出　大阪　蒼梧樓
娘はいゝが親がおそろし　同
麗らかさ人の立場を考える　同
童貞へ吹く春の風春の風　大阪　愚陀
そゝくさと中の笑ひへ下駄をぬぎ　同
冷めたさは心斗りと思はれず　香里　武子
せきせいをさすが女に夕陽さす　同

ザク〳〵と金貨使ひもせずにもち　大阪　白人
信頼をしきつて醫者へ帶をとき　同　同
特價品夫婦がゝりで一つ買ひ　大阪　虛白
いゝ口も臺灣ではと母は言ひ　同　同
春の川目高の列もいさましし　大阪　桃哉
寢付かれず柱の割れる音淋し　同　同
太陽が出るぞ〳〵の松林　島根　緣之助
私の病氣勝手に決められた　同　同
儲けたを云はず今夜は俺が出す　大阪　聞路
春の宵今更蒲團きたながり　同　同
合ゝ冬いつしよにゆける服を買ひ　姫島　觀月
上品な口へ卷ずしちぎれてる　同　同
死ぬ〳〵は病まない先に言ふた事　螢ヶ池　紫海
二十一初めて人の味を知り　同　同
晩年は皆んな淋しい名士なり　大阪　萩麿
二三年經つて近所は後家をほめ　同　同
子供らに程よく砂利がつんで有り　同　翠川
ウキンドの値段ゝ別な氣でながめ　同　同
呑む口と聞いて仕度は手間取らず　同　兩足子
面當てに叩く其の子の苛らしく　同　同
生花の歸り電車を狹う乘り　同　南天
中年の戀は林檎の一つなり　同　同
幕ひきの水商賣が淋しそう　長春　菱明
竹の篩一つ細工ゝなつてゐる　同　同

繪馬堂の黑髪の生々しさよ　大阪　伴内
ありたけを鞄に嬉し一年生　同　同
こうまでも金がほしいか父の慾　神戸　春公子
不景氣が何ぞウェーター美しく　同　同
大學を出たは貧乏なればこそ　大阪　惡源太
其の筋の達し「すべし」で終つてる　同　糸柳
消防の歸りを待たずねてしまひ　同　同
辻五目思案の末に負けて去に　同　同
酒の上ほんとうのことしやべりすぎ　同　湘里
ある時は自分の算盤おく丁稚　同　同
闕つてるのは結局は叶へる氣　島根　雷相
卷煙草帶締直す妓をながめ　同　同
女房は金持の氣で居るらしい　大阪　秀郎
算盤で子をあやしてる暇なこと　同　同
令孃が二人くるのも花屋なり　神戸　鎌月
春先の道をまつすぐのほるなり　同　同
春雨を新代議士の上る汽車　大阪　凡平
就職は難し櫻の花が散る　同　同
ふところに夢をかゝへるおとなしさ　神戸　山果
おかしさは妻と意見が合ふのなり　同　同
儲けたと見へて近頃繪をならひ　大阪　白柳
生徒監五目並べを見て通り　同　同
貧乏の中に行儀を忘れてる　神戸　水火

誘惑の手を振り切つて嘲けられ　同
子のやうに老いたる人の年をきく　大阪　壽枝女
風呂へ兒はみかんを持つたまゝで來る　同
風邪心持女將やたらに着て座り　松江　舟帆
友達が來るで間借りの床を上げ　同
ブラチナに見ゐるこ女うれしがり　大阪　青歌
子に話す聲なあ〳〵に力入れ　同
あゝやつて踊つてゐるも人間や　赤城
あの姿俺ならとうに死んでゐる　同
人間にめぐり會うたこ言ふて飲み　泰平
骨がある樣に冷水のんでゐる　汀柳
退屈を紛らす爲の友ばかり　同
この雨に犬も行く處ないのなり　山口　啞人
未だ醉が養子にあつて歸り得ず　同
晝遊び仲居一遍來たばかり　神戸　素生
氣を付けの格好になる身長器　同
いんま寢ましたこ女房縫ふてゐる　姫島　二竹
閉めきつてからも用なき獨り者　同
東西屋太鼓たゝいて春が來た　大阪　新一郎
遣瀨なさ庭の櫻に殘して出　同
立廻りでもありさうな景色なり　島根　花情
あんたも慘めですわこ女同志也　同
朝戻り天の高さが情なし　同

美しく惠んだ金が少な過ぎ　神戸　志郎
張り合ひもなく鮮人の髯は伸び　同　同
葱一把買ふにも供のいる女　同　重陽子
蹴こばせば外れる雨戸閉めて寢る　同　同
暖房具總て非役の春となり　大連　北仙
さなきだに石と錢とは火を發し　同　同
優待を受けて内金丈け貰ひ　和歌山　玉仙
もう笑ひまずと言ふのが父の聲　同　庚子
土を持つ親しさ春の野に出かけ　西灘　笑人
櫻となつて女湯すが〳〵し　山梨　一笑
生きて行くには關係の無い座談會　大阪　かい痴
降參をすればする程强く出る　鞍山　可樂
ひがめ〳〵と盆栽は育てられ　大阪　週天堂
呼び捨がモウ丁稚には腹が立ち　同　幸泉
學問はなくとも年が上であり　同　狸仙
奉公に來てから親の愛も知り　大阪　佳風
筍の最う今日からは竹になり　同　夢一
末席は女高師組につゝまれる　三重　昌幸
監督の指輪重たく光つてる　河内　三次
圓本にまで性格を兄は見せ　長野　高峰
今日も行く明日も寂しく來るだろう　盤ヶ池　柳子
待合へ馬鹿にするなと息子のみ　大阪　秀甫
クロバーの踏まれてゐるをふと見かけ　同　白雲堂
溫順しくすれば頭に侮られ　同　曼平

臨終の舅嫁をばほめて死に　同　將軍星
奈良めぐり鼻の穴だけ見て戻り　同　北城
ブリキ屋が退いて靜かな町になり　大阪　正吉
不景氣の話呉れない客だらう　京都　桃妖子
パンを得る力にさへも疲れ果て　大阪　苦香瓏
桃割だけが渡船に殘される　大阪　賀名芽
はかなさは何時迄經てご切符切り　鳴尾　鳴玉
安心をさせる孝行嘘もつき　石川　水聲
胡蝶吸ふ程だが貳號手離なせず　大阪　呵々子
嘘つく子嘘つきながらしかる也　同　籬楓
あの娘嫁がず店を切り廻し　同　將兵
執念深い女ミ思ひ逢つゞけ　同　吉朗
大たんに裏切つて見るふすま越し　山口　迷羊
獸になり切つて居る俺を見る　兵庫　珍郎
キネマ誌を投げて冷たい床の夢　島根　吐二也
遊んでる方へ女米パンの聲　大阪　陽喜亭
春の陽が象の餌物へ薄く射し　長春　箱八
女將もう緣喜ばかりで暮らして來　四宮　九牛
製材の鋸の音も夜もすがら　安東縣　花蝶
人がごう言はうが妾これでよし　堺　太路
苛なまれしミ見ゆる浮雲　大阪　武藏
餅拾ひさすが女は女なり　兵庫　香行
花嫁の來る自働車へ道を開け　大阪　白帆
信心か知らねごケーブルカーに乘り　兵庫　陽春
逃げのびる石其石の持つ强さ　大阪　與詩夫

川柳の本質（六）

田中辰二

甚だしきに到つては百人一首の中央頃に女流作家が並んでゐるのを見立てゝは

中ほどへ定家女　郎　屋ほどならべ　（柳樽　二八）

全體の作者を穿鑿した統計上の句

七十九　男で二十一　女　（柳樽　二四）

精　進が十二　八十八　魚類　（同　三六）

と云つたやうな柳味に乏しいものさへあらはれてゐる。

此種の例は極めて多い、いくらでも盡きないが其の輕いものほど快よい笑ひが出て來るものゝ、わざとらしい作意のあとにはわざとらしさの笑ひより浮んで來ない。川柳を特殊に研究をもしないで唯このやうなわざとらしい句が川柳の勝れたものであり川柳の全體であると考へるならばそれは頗る危險であり大膽な獨斷である。何故かなら穿鑿に過ぎ理窟に走り過ぎたのは川柳の基調たる明るさ淡さ、輕さから遠ざかつて行つた邪道だからである。之と言葉の上の駄洒落とを弄ぶ、無理な笑ひの句とは、狹い意味からは狂句に墮したものと云ふ事が出來るであらう。

更に川柳の本質の方面から見てもう一つ忘れ難きものは其の特殊な感覺美である。

川柳を味はひ江戸の世界に想到するごとに私の頭腦に展開するものは土佐繪の典雅さでもなければ狩野派の繪に見るやうな傳統的な重々しさでもない土佐に棹さし狩野の流を汲はしたらうけれど新興の江戸に新しく興つた藝術浮世繪の持つ清澄さである、鑛物質のごつしりした氣分を與へる顔料に塗抹された暗さは消えて、澄み切つた明るい輕快な感じを與へる植物質の顔料で刷出された江戸繪の世界である。儀式ばつた衣冠束帶より

は湯上りの浴衣姿にふさはしい世界である。

緋縮緬白い所をなめるやう　（末摘花四篇）

恐ろしく印象的な句でエロチッシュな匂ひは免れないけれど此短詩で描き出される女性は現實の醜悪の所有者ではない。醇化された、でも何處かしらに蠱惑的な官能的な氣分を出してゐる歌麿の藝術か、さなくば柔かいおとなしい線に浮世ばなれしたあたゝかさを描き出す春信の女がほうつと浮び出すやうな氣がする。かと云つてその描かれた女性をごうしようと云つた慾求を持つのでは無く唯美しさを美しさとして客觀の世界に置いてそを心ゆくばかり鑑賞するに留まつてゐる。觸れざる純潔さが溢れてゐる。更に

待つ顔（櫻をりく散りかゝり　（柳樽、五篇　拾遺、寶暦）

の如きに到つては止に浮世繪以外に求められぬやうな美しさでは無からうか。此の句にあらはれてゐる櫻は

中の町櫻に人をつなぐとこ　（柳樽　五）
夜櫻は年よりの見るもの でなし　（同　七）
中の町こきまぜるのは柳ごし　（同　七）
花迄も盛りがすむと置かぬ所　（同　七）
櫻まで突き出しに出る仲の町　（同　七）

の仲の町櫻である。張りを生命とし意氣地を本領とした江戸吉原の畵三――太夫、格子、散茶卽ち黑二重山形屋以上の女――は毎夕仲の町の茶屋まで出掛ける。揚屋人の遺風で仲の町張りと唱へるがその道中の有樣は浮世繪の好んで描く題材である。

裲襠姿の美しい太夫は臺高の塗下駄をはいて或は左の袖を撮み（江戸町一扇屋）褄を持ち（江戸町二、蔦屋）或は帶に手を置き（江戸町一、角玉屋）裲襠の兩方を持ち（京町一、俵屋、四目屋）八文字を踏んでゆく。遊女の紋をつけた對の臺付提灯を持つ者、揃ひの衣裳をつけた禿、さては番新（番頭新造）振新（振袖新造）鴇婆、若い者などに守られつゝ、若い者に長柄の傘をさしかけさせて行く太夫の格式は階級制度の嚴肅な江戸時代の反映であらねばならぬ。その太夫がやがて仲の町の茶屋に落つ付いても馴染客の事は自身で訊ねはしない、附添の新造が訊ねるだけだが、でも心には懷かしい馴染か來るか來ぬかを思はぬでは無い腰かけに餘る程の衣裳をつけて

中の町おつこちさうにこしをかけ　（拾遺　明和）
仲の町なまけたやうに腰をかけ　（柳樽　二四）

た遊女の姿態『花になく鶯水にすむ蛙にも雅びは同じあひたいの雲の籬の漁り船流れ次第や風次第綠の髪につながるゝ櫓を枕に港ぞね』その流れ次第風次第とは云ひながらも若しや來ぬかとあてどなき心待、暮れむとして暮れず入相の鐘にはら〳〵と散る中の町の櫻、待合の辻で物待ち顔に見上げる遊女の顔。それは榮之のねらふ畵題である、實感を遊離した浮世繪美である、その光景を浮べて待つ顔への句を思へば物やはらかな美しさが溢れて來るやうに思ふ、而も此の句の作者は何等描寫にこ

だはりもなく淡泊に片付けてゐる中に十分のゆとりを見せてゐるやうである。

椎の木を飛びこすやうに猪牙はゆき　（柳樽　一〇）
ちよきのふみへんぼんとして讀んでゆく　（同　一三）

柳橋から山谷目がけて一葉矢の如くに走る猪牙船、松浦邸の嬉しの森の大椎の木を右手に見て船宿から受取つた遊女の通ふ紙をはら〳〵と風になびかせて搖られゆく客の姿態、其處にも淫蕩的ではあるが一つの美しい繪が浮び上る。

勿論遊里は今日のそれの如く醜惡の場所と云ふよりは異る色彩を江戸時代には持つてゐた筈である、極端な戀愛否定主義の張つてゐた社會に唯一の許された戀愛市場、其の當時にあつては江戸の吉原であつたらう。そこは武士客が遊客の七割も占めた時代もあり嘗ては史實とは稍異らうとも伊達綱宗（綱村とも）や尾張宗春や、榊原政岑をも迎へた。格式もあり張りも多かつた。それに驚異の眼をなげかけたものもあらうし淡泊をよろこび物に執着しない江戸ッ子はそれを讃美したものもあらう。江戸文學の一面は此の吉原が大背景となつてゐただけ川柳にも此の吉原關係句が多い。畏友西原柳雨君が最近增補訂正された名著『川柳吉原志』を覗いて見ても一萬餘句は採錄されてゐよう云ふまでもなくそれには狹義の川柳と所謂狂句が雜然としてゐる事は柳雨君自身も認められる所であるが研究資料としては立派な集成品であると思ふが。兎も角その關係句がそれ程多いと云ふ事も考へやうによつて怪しむに足らぬ現象であつた。而もそのごれもに漲つてゐるのは矢張り何處か明るい美しい氣分である美しさは道德的のものでは無論ない、感覺的の美しさである。やはらか味と洗錬された心持とから描き出す美しさである。だが此の感覺美はひとり吉原關係句のみでは無い勝れた川柳の作品を通じて隨所に見出し得ると思ふ而も特に勝れたものには華麗の感を起す事もあり蠱惑的な魅惑的な所もあるが多くは強い感覺美で而も自然的に發露するデルベである、がこの感覺的な態度が極度にすゝむと刺戟的なそし　劣情をそゝる末番の句となる。あらはれるやうになる。そして赤裸々な描寫をも敢てするが爲に時には不愉快な感じを引き起すが時にはその中にも捨て難い作物を見出す事もある。

私は川柳の本質に對して之等の滑稽諧謔やうがちや感覺美を擧げれば或る程度まで確であると考へるが之等の本質が直に藝術としての價値を高める標準になり得るや否やは本稿で云ふまい。併し雜俳として今まで餘り顧みられなかつた川柳が世界獨特の短い笑ひの文學、うがちの文學、感覺的な文學であると云ふ以外に、江戸時代に發生した眞の民衆詩であり人情詩であると云ふ以外に、猶江戸中心時代の制度、慣習、風俗、信仰、言語其他の生活の縮圖である。川柳の研究によつてさうした方面がより闡明されてゆく機會の來らん事を要望するものなる事を附記したい。（完）

月評【前號】

路郎　紋太　松郎
山雨樓　春三

近作柳樽　春三提出

その表情で釣る氣か女おろかなり

冕卓

春三……此句はリズムにおかしい點があると思ふ。リズムと云ふことは作句上非常に大切なことであるから、作句者は勿論我々もハツキリこのリズムといふことを頭に入れて置く必要があると思ふので、皆樣に簡單に研究して頂いたら結構だと思ふ。

近頃の作品には往々リズムを無視したものが多い樣に思ふ。リズムを無視すると云ふ事は、只十七音になつて居ればそれでリズムが合つてゐると考へて居られる人が多いと思はれるからで。十七音になつて居なくてもリズムに合つてゐる句もあれば、十七音になつてゐてもリズムに缺點のある句もある。然るに十七音でないと云ふ事とリズムを無視するといふことゝを混同されてゐる傾向が、一般にないでもいと思はれる即ち句が「五、七、五」と三段で讀み下せるとか「五、七五」と二段に讀み下されるとか、又は「五七五」と一氣に讀み下せるとか云ふ風に十七音に合はすことにのみ專念して その讀み下される時の調子とか 韻律とかを全然無視されてゐる人が少なくない樣に思はれるので、此句を提出したのである。

松郎……春三君の言はれるのは「その表情で」といふのが、リズムにかなわない樣にいはれてゐる樣に思ふ。「その」を取つて「表情で釣る氣か女おろかなり」とすれば十七音にもかない、十七音の正確なリズムになると云ふ樣に、お考への樣であるが、「その表情で」と云ふことはリズムが外れてゐる樣に見え、又聞こえる樣であるが、別に障りがない樣に思はれる。此位の程度は單に上五文字……上五音のリズムとして差支へないと思ふ。程度問題が許されるか、許されないかといふ點にあると思ふ。

春三……此句だけでいふと「その表情で」がリズムに合はないと云ふのではなく、句全体を云つてゐるのである。「その」を取れば此句の價値が減ずので、別に他の言葉を使つて下五か中七で何とかならないかと思ふ。「その」を取つたからと云つて、果してリズムに合ふか合はないかは大きな疑問だと思ふ。次に出てゐる冷笑君の「雨もまたやつぱり俺に似て孤獨」の句は十七音になつてゐるが、「また」を取れば十七音でなくなるが、その方がリズムに合ふと思ふ。要するにリズムは字をちやんと十七音に當てはめても 出るものでなく句の内容が言葉に乘りうつつて行くやうにしたい、此の場合の「また」などは十七音に足りないから「また」を入れて十七音にしたのではなからうがと云ふ邪推も起つてくる。「その表情で釣る氣か女おろかなり」の全部が變である。

松郎　…春三君の言はれる 意味からいつても此句はリズムに外れてゐる樣なことは 無いと思ふ。それと今例句にあげられた「雨もまた」の句の「また」を取つたならば十七音でないがリズムにかなつてゐると 言はれたがその句よりも「その表情で」の句の方がリズムが整つてゐる樣に思はれる。

山雨樓……此句に就いてリズムが問題にされてゐるが、春三氏の言はれるリズムに對す

る疑問といふのは、句を讀み下した時の調子ではなく、感情の閃めきを如何に言ひ表はして居るか、即ち感情の波動が如何に表はされて居るかといふことの問題だらうと思ふ。

然しさういふ方面のリズムといふことを此句で考へるならば、此句の内容は餘りに單純であると思ふ。隨つて此句では感情の波動といつたものを問題にするまでもないと思ふ。普通にいふ句の調子…さういふ意味では上の齣が七音になつてゐるだけに多少讀み下す上に於て障る樣に思ふが、これとても松郎氏の言はれた樣に、餘り障つてゐないと思ふ。それで僕の此の句に對する考へは、句の内容が餘りに小主觀的であり、餘りに單純であることがあきたらないと思ふ。

紋太……山雨樓氏の説に略同感です。それ以上云ひません。

路郎……川柳のリズム位むづかしいものはない。僕は可成り長い間苦しんでリズムの研究をいたして居りますが、なか〳〵はてしがつきません。近い將來に於て川柳のリズムに就いて單行本を出したいと云ふ考へを持つて居りますので單に川柳のリズムに限らず他の詩歌、音樂教典などのリズムについても調べて居りますが此場合にそれらに就いて語ることは避けて置きませう。只此句に就いて嚴重に申しますと、此句の内容を表現するのに、適切なリズムを成してゐないといふことは云ひ得られると思ふ。成程此句の調子はこれで兎に角ある調子を成してはゐるけれども、單に有合せの調子を藉りて、その句を表はしたといふだけではリズムの上から見て、完全であるとは云ひ得ない。ではリズムの完全を期するのは、どうしたらいゝか、どんな句に於て最もすぐれたリズムを形成するかと云へばその句の内容をなす感情の波動そのものが最も適切に表現されてゐる場合、即ち内容と韻律とが完全に一致の形を取つた時に始めてそのリズムが生きたものとなり、句を生かすことになるのである。もう一度繰り返へせば句の内容とそのリズムが一致して讀む者にぴつたりと作者の感覺を其儘に傳へる響きをなさなければならぬ勿論その句の内容が優れたものであることは言ふまでもないことである。

松郎……路郎氏の最後の説は一般作家に取つて非常に味はふべき言葉である。ところが私が最初春三君の言はれた、此句に就いてのリズムが變であるといふことに對して云つたことはそのリズムが所謂外韻律のことに就いて云はれた樣に思つたからで、その點はこの程度で差支へない樣に思ふと言つたのであるが、山雨樓氏の御意見に依れば、感情の波動云々と言はれましたが、それは内韻律のことを指して言はれた樣に思ふ。

山雨樓提出

月給の上らぬ先に子が生れ

重陽子

山雨樓……或は類句が有るかも知れないが近作柳樽を讀んで、此句に大變惹き付けられた。額句の懸念と同じ樣に想の陳いといふ懸念も無いではないが、これなどは人生詩として、そして民衆詩としての川柳の一端を代表してゐるものと思ふ。僕は此句に就いて句主の感情が皮肉でなしに、人間の愛と云つた樣な感情を齎らしてゐるので惹き付けられてゐる。

春三……無論悪い句ではないでせうけれどそんなに良い句だとは思へない。殊に此句の缺點は餘情に乏しく、潤ほひが少しも無い點である。一へん讀み下した時には成程とは思ふが頭に深く殘らない。そして事實が其儘に表現されてゐるので、も一つ説明に過ぎない樣なところがありはしないかと思はれる。又一面から考へれば山雨樓氏が常に排斥されてゐるウガチが大部分を占めてゐると云つて差支へないと思ふ。

路郎……まあ難を言へば句が露骨過ぎる點であらう。春三氏の説に贊成したい。僕の句に「天井の低さも知らず子は生れ」といふのがある。（大正九年頃の作）

紋太……僕も此句に不足を感じます。叙法に切實な味はひが出てゐない。子が生れと言つてあるのに、子が生れた樣な感じも受けないさういふ時に子が生れたら困るだらうなアといつた樣な弱い心持の句である。

松郎……こういふ想は山雨樓氏の言はれた樣に想が陳い樣に思はれる。といふのは作家として始めに誰もがれらふ想であつて、一樣にこういふ表現をするのである。然しながらさう言つて片附けて了ふ事は、句そのものを批評をする時の言葉であつて、句の作者を通

じてこれを見ると、此作者はさう古くない作者であつて、所謂類句とか同想が他に有るとか云ふことを餘り知つてゐない人だと思ふ。でさういふ程度の現在の作者の句としては相當成功した句と思ふ。で作者はさういふ事を玩味されて假令陳いこういふ想を摑まれても、先程示された路郎氏の「天井の低さも知らず子は生れ」といつた作者獨得の表現を踏む樣に努力するといふ心掛けを持つて頂きたいものである。これは作者のみでなく私達も心掛ければならぬことと思ふ。

山雨樓……類句とか、想が新しくないと云つた懸念があるに拘はらず、惹き付けられたのは、(多少柳論に亘るかも知れぬが)こういつた人生の姿を十七字詩で表はしてくれることは、川柳の或る一つの特長である。そしてこういつた想が、現在の激烈な生存競爭場裡に於てどれだけ人生を考へさすかに就いて興味深い或る力に打たれたからである。

詩としての表現から行けば説明とか、或は幼稚であるとかいふ非難もあるだらうが、人生を端的にこう云ひ表はした。又作者が人生の哀れを感じたといふ樣な或る斷片を提供したことは一面から云へば、これが其の人の詩であり、リズムであるとも云へる。こういふ句は、よし藝術的に優れてゐなくても、考へさすべきものを多分に持つてゐる作者の人間的な感情だと云へるだらう、それでさういふ意味に於て此句は餘情が籠つてゐると見られないことはないと思ふ。

路郎……いま山雨樓氏から柳論があつたので私も此句を抜いた責任上「近作柳樽」の選句について(絶へず言つてゐることではあるが)も一度繰返して置きたい。近作柳樽では從來の川柳の樣に、茶瓶が彼方を向いてゐたとか、此方を向いてゐるとかいふ樣な、ほんの一寸したことの面白味を捕へて句にするのでは詩としては甚だつまらぬものだといふ意見である。その句にはその人の人生觀なり、或は社會觀がハツキリとにじみ出てゐるものでなければならぬといふ根底を主眼に置いて選句をしてゐるのである。だから多少其句に難があつても、その作者の技倆に應じてこれを選んで、更に出てくる良い句の先導句としたいといふ意にほかならぬのである。本當に優れた句を望むならば人生が巧みに表現されてあるといふだけでも足りないと思ふ。その句に依つて人生をより深く考へさせられ、更によりよき人間生活に到達されべき句を啜まれたいのであるが、それはなか〳〵むづかしいことである。

川柳塔　松郎提出

春風に玉子を賣つた金を持ち

翠峰

松郎……想と云ひ、叙法と云ひゆるやかな良い感じを與へる句と思ふ。一見平凡の樣に見ゐるが、自分は昔からこういつた句が、川柳として上乘の樣に思つてゐる。

紋太……言ひ譯の樣であるが、今日此處へ來て座つたことが辛ふじて爲し得たことで、批評をする氣持にまだ心が落着き兼ねてゐます。先程の句も亦此句も何だか私には滅茶々々に映るばかりで、批評に乘氣にはなり兼ねますが、努めて此句から受けた感じを申しますと、少しも私に面白味を與へる力を持つてゐないと思ふ。「春風」と「玉子」とどちらも溫和しい感じのものを列べて面白氣に見せてあるとしか思へない。それと云ふのが少し可笑しい話であるが、私の友達が最近養鷄場の經營に失敗したので、此句を内職に鷄を飼ふ程度でなしに、本當の養鷄場主の心持の方にされて、何だか拵へごとである樣な心持が起るのである。それで養鷄家などが此句を見た時に此句を嘘であると云ひはしないかと思ふ。要するに此句は句としてのみ面白味を感じる句ではあるが、實在の場合には、こうした感じは無からうと思ふ。

路郎……句を讀み下した時に表現上餘裕が有り過ぎる樣に思ふ。これは比較的感激が薄いのに、其儘句となしたといふ樣なところに原因があるのであらう。同じ作者の「人蔘の赤きが故に好き嫌ひ」ほどに强くありたい。

山雨樓……「玉子を賣つた金を持ち」といふ氣分は確かに川柳的である。然しそこに「春風に」といふ上五を持つて來たのは、月並だらうと思ふ。先刻紋太氏は養鷄場主から見た此句は、作り事の樣に見られる懸念があるとの御話であつたが、これはさういつた大きな商人でなくして、内職的に百姓などが鷄を飼ひ、町に玉子を賣りに行つた、その歸りの氣分といつた樣に受取れば、松郎氏の言はれた

様に、川柳味の優れた句といつて差支へないだらう。只上五の「春風に」が全然作り事でないにしても句主の觀察が餘りに平凡であり常套的である。此の上五に如何なる內容を盛るかといふことが此句のも一つ突き進んで考へなければならぬところだらうと思ふ。

春三……僕も養鷄家の樣な氣がしない。山雨樓氏の言はれた樣な人物を描く方が、此句は面白いと思ふ。それから「春風に」と云ふのは無論常套的であるが、此場合玉子を賣るといふ時の春風は所謂春風でなくして、此句の氣分から云つて「春風に」が輕く一致して居ると思ふ。僕の考へたいところは「玉子を賣つた」といふ言葉をも少し働らかしたい點で「玉子が賣れた」としたら「金を持ち」といふ言葉が生きてくると思ふ。

紋太……「玉子を賣つた金」は相當纏つた金を思はせるので、僕は養鷄家の方に取つた。それに春頃の玉子の安さなどを思ふので(ほらい商賣人見たいな事を言ひますが)何だかよけいに變に感じる。さういつた常識を持ち出させる樣に此の句の叙法がさせてゐると思ふ。

松郎……先刻山雨樓氏が言はれた上五の「春風に」が常套として排斥されてゐる樣であるが、此句の叙法を見ると、感じを最も忠實に素直に云つてあるので、少しも飾り氣がないのである。殊に上五の「春風に」と云ふことは春三氏の言はれた說で、此句の感じの起つた背景の麗らかさと云ふ樣な意味を表はしたものと思ふ。大抵の場合にその「麗らかさ」と云ふ文字を其儘に持つてくるとこであるが麗らかさと云ふ川柳の最も適切な語法を置かずして「春風に」と正直に持つて來たとこが一層此句を引立たせてゐると思ふ。

路郎提出

琴泉君の愛孃を悼む

さし上げた子が死んだとは思へない

二一柳子

路郎……此句を讀むと作者の純情が、非常に素直に出てゐると思ふ。そして僕が前說に述べた、所謂人生の表現といふ樣な點から見ても佳句たるを失はない。由來川柳家は、前書の句が非常に拙であるが、此句は其點に於いて大いに成功してゐる。

紋太……作者の心持が飾りなく出てゐると思ふ。全く川柳を知つてゐない人が見たときには、これが句であると云ふ風には思ふ事が出來ないかも知れぬが、少なく共作者の心持は確かに感じ得るだらうと思ふ。川柳に親しむ私が此句を見たときは、一層作者に共鳴して繰返して讀んで飽きない味はひがある。

春三……前書の句殊に人の死を悼んだり、祝をしたりする句は、路郎氏の言はれた樣に今までは隨分實感の無いものが多かつたが此句などは實感がある點で結構だと思ふ。同じ前書でも「山中溫泉にて」といふ樣な前書は一般に與へられたものであるから、批評の餘地があるが、個人に與へられた、こういふ樣な句は、僕としては批評の外に置きたい氣がする。

松郎……此前書にして良く纏つてゐると思ふ。先程路郎氏が言はれた如く、一休川柳家は前書の句が拙であるといふことは、こういふ場合の句を作るときに於て、作者の心持なり作句態度かに、所謂こういふ風な子の死んだ場合には先方の親達に見せるべく句を作るといふ樣な觀念が主になるために、本當の主觀が忠實に言ひ表はされないで、虛禮と云つた樣な「作り句」になつて了ふ樣に思はれる。さういふ意味から此句は、子供の親達に見せるといふことから全然脫して本當の追悼の主觀を表はしたので、成功した樣に思ふそれで前書の句はさういつた意味で作りたいと思ふ。

山雨樓……僕はもう皆樣の評で盡きてゐると思ふ。大變感じがよく表はされてゐると思ふ。

（茶郎記）

川柳塔

○　岩本素人

靴磨く閑はないではないのなり
寐てるのへいらないものを賣りに來る
就職を頼みに雨の山を下り
牛肉はみんな子供等に食はれ
學校を出て洒落が解らず
貧乏もよし初夏のすがくし

○　松盛琴人

口笛は聞こへてゐれど母が居て
村落にて（二句）
坂下へすてられたやうに馬車屋住み
ようゝ嘘をつく唇の尋常さ
藥瓶さげて女の細い事
そつけない女となつてすれ違ひ

一人寢の床は固いな冷たいな

○　太田朝陽

學校の樹蔭昔しのまゝにあり
橋上で見る飛行機は近く見え
半襟の中で愚痴云ふ母の顔
宴會に仲居火事まで說明し
一ト苦勞二タ苦勞して師になれず
海を見て松を見て氷屋急しく
云ふ事が無くて子守の嘘ばかり
破門されてから先生の恩を知り

○　三好革郎

蚊よ蚤よ涸れきつた血が吸ひたいか
縊られる腕一本のかほそくて
奇蹟でも待つ氣持にもなりまする

○　庄萬よし

事務的に勞働的に女肥へ半金を渡しおたなも暇ですか

○　西本三笑

コスモスを愛でる少女をうこましく
歯車のやうにもなれり我が頭
ヒステリーほかに男がないさうな
しんみりと口説くに女給足拍子
御在宅ですかに襟へ針を差し
奥様にすまぬと云はれてれくさし

○　横田眠聲

元は元ただへいく〳〵と父は老け
七轉び八起き髭までそりをこし
人間の弱さへ金がつまれたり
出來心ぬきさしならぬ身こはなり

○　岩崎柳路

下宿屋の三階のいつち隅に居る
メーデーに身重らしいも混つて居
洋服に背り傘らしく目立つなり
教室に乃木希典のすゝけて居
炭を燒く煙へ牛の聲がして

○　高見柳骨

讀む氣では居るがいゝのが邪魔になり
親切を無にするなこと姉藝者
こつんこをしても二人はよく眠り
じやが芋に芽が出て居ます南向き

○　矢田右大臣

母性愛脳をあけるに躊躇せず
入院を丁稚したいと思ふなり
庭へ種蒔いたる事の雨もよし
夜學の道の藤が滿開
子の丈けを去年はかつた柱きず

○　酒井駒人

綻びたまま仕立屋の子は着てる
廻り道しても寄つてく女親

○　橋本二柳子

父のゆるした頃に戀は眠さめてる
空氣銃雀の戀を見附けたり
神樣もはばかりながら知るまるな

畑にて

學校へ行かぬ子が父呼びに來る
その腰つきをみんなが笑つてるます

◇　松丘町二

子のために梯子となつた父であり
貧しさは髯をむしつて喰ふばかり
男の誓を笑ふ月見草
女優めく妻の笑ひに遠くゐる
病上り箸に重さのあるを知り
紅玉の燦爛として拓榴落ち
魂をぬくめる酒となりました

言はれるまでもなく悲しい癖と知る

楊井一南

◇恐ろしき一ッに素顔數へられ
現實も夢も決斷力がなし
新學期靴の重さが分るなり
夏服に着代へて戀を續けんか
ホームランヒットの如く生きんかな

友の入學を祝ふ

思ふこと適ふた膳に長くゐる

昇格を喜ぶ

校長の窓から櫻見ゐるなり

桑原京郎

◇けんけ草男が摘めばむごたらし
蒲鉾になる日の鱶の大口や
合ひ間には額おさへて女事務

水谷鮎美

◇何をうたふや紙幣束の上の蠅
齒にきぬきせぬ男の眉太く
きんかんの種が彼の女の膝に落ち
キユピーは反抗もなく凹んで
上役とならんでかゞむ癖がつき

島田翠峯

◇凡人で地上をけがす五十年
煙草入れこれも愛用だつたのか

ごさくさのあこは男の手を借りず
前栽の花を見て置く母なりき
花のあるここで休めば錢が要り
夜櫻へ母は鼻紙忘れて來

中野柳陽

◇御自慢の植木が枯れてしまひけり
完全に勝つて世評へ笑ひかけ
手術臺メスに妥協のない光り

中澤濁水

◇あるたんぴ子が多いので嫁きおくれ
この幕のまた後添へ氣がまはり
火事に逢ふやうに保險を勸められ

兼重白鷗

◇一束の手紙の中の春や秋
勝つ方が足がしびれて碁が更ける

猪野燕柳

◇逢ひたさを見せず氣强く母は逢ひ
新綠を見て貸ボート塗りかへる

安西杏三

◇烏既に朝を感じて音を立て
人が見てゐるかも知れぬ肩を張り
下げるだけ下げた頭を又ぶたれ
轉寢に話せし人の片ゐくほ

水田黄彩

◇盆栽にする氣の父へ反抗し

◇膏藥で膿む迄待つも女なり　中島鐵州

橋の名へ知事惡筆ふるつて居
砂金採りにいつそ行かうかなと思ひ
春の君の質問振りを婦人席　朝田新水

◇結婚後愛の家庭と思ひきや
結ひ立てにきつうは吹けぬ火吹竹　越村加香

◇落藉されて四年素足のなまめかし　中見光路

◇弱い氣のなんでしたらと附加へ
半分はこれ見よがしの櫻植え
國からの書留縱に裂いて出し　森田笑太郎

◇鏡臺にむかつて蚤は飛ぶつもり
金柑を嚙んだ女の子の目と目

粒々集

御影　長崎柳秀

持參金笑へば凄い顏になり
い、人の噂に女給笑ひ合ひ
すかれますさかいと長い腿を撫で
口笛は意見をされたとは見えず
還暦と云ふに妾に子が生れ
貸浴衣夜店の端で辻を折れ
返すにはどうせ足りない金を呑み

高島田すこしねぢれて禮に來る
高島田あまえる風に朝を起き　大阪　伊藤彦造

髷の根がゆるんで今日も日の永し　大阪　塚崎松郎

めい〳〵が思ふ世の中にはならず
兒の寢息ほごごうごきものは無しと知る
消炭もやがて火になり灰になり
セルを着て夫とならび撮される
默つてゐても得ることがあり
丸刈になつて世間を欺むかん
飯粒の白きごうとき膳の上
皆の笑顏を見たいのに他ならず
其れも是れもはつきりさせばお終ひだ
要するに古人が言つた如く也　光州　蛭子省二

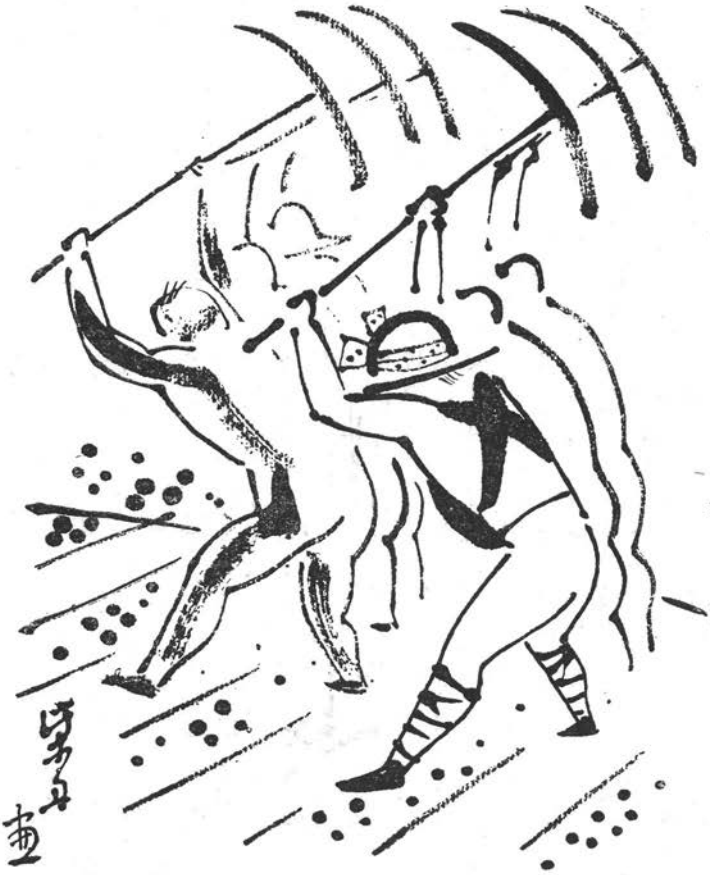
腹いたむ旅果ての蠅にも親し
緣喜話の灰皿へ西瓜出る
墓地をきめて飴湯のむ足袋の埃り
ゆすらの皿へ病上りの妻の酌
二階からきいてゐる旗日の不足稅
齒入屋のあと掃除を出拂いし春
眞夏の月掛けを勝手で渡す
アンテナの青空仔犬乳をのみ
旅娘の細きかひなへ蚤のあと

川柳漫畫 人の一生

路郎 柴舟 畫評

轢けるなら轢けと
鶴嘴よく揃ひ 聞路

鶴嘴の一上一下に……詩人はうら〻かさを觀、資本家は反抗を觀る。



苦勞しぬいて墓石のみすぼらし

嶺月

このみすぼらしき墓石こそ彼が七轉び八轉びの痕跡を地上にのこす唯一の慰藉か。

鳥よ。
糞尿によつて彼が靈を穢すこと勿れ。

斷髮の手切金とも
やう云はず　右大臣

斷髮こそすれ、これをモガと見んには、あまりに弱し。飾りなき部屋に、齒の缺けたる櫛の淋しく横はれるも憂鬱を誘ふに充分なり。

泣くなとは君も矢張り他人だね　杏三

『君は僕にとつて虚偽の世の中をハツキリと見せてくれた恩人だ。では、これで君とも別れやう。』

春の日曠野抄

―（幸田露伴博士の近業）―

前田雀郎

次掲前田雀郎氏の「春の日曠野抄」は蒼臘東京都新聞（數日間連載されたもので、當時俳壇へ一石を投じた名文であつたのみか、文壇にも波紋を起した、即ち川柳家として「よい事」の一つであつた仕事であつた。發表當時、小生再讀、宜しくこれを巻末匆々の間に葬るに忍びず、平に麻生路郎氏に乞ふて その意を圖つた。路郎氏元より小生の愚直なるを知るのみか 前田氏の核心を摑む者である。川柳人偶々舌を弄するものありと雖も 未だその舌よく川柳の埒外に出づる事なく然かもその埒内の烏鷺問答 愚劣聞くに耐へざるもの多しと聞く、その言果して眞なりとせばこれやこの「幸田露伴博士の近業」は即ち亦前田雀郎氏の近業たり。（川上三太郎）

俳句のみを見て芭蕉を語るものは、まだ彼の横顔より知らぬ人である。彼の全貌を窺ふには、また連句に於ける彼をも知らなければならない。

發句は俳諧の全部ではない。殊に芭蕉のごとく、俳句に於ける彼と、連句に於ける彼とでは、そこに――俳句には極めて小心であつた彼も、連句には大膽であつた。――全く別人かの感ある二面を有してゐた俳人にあつては、一を以て俄にその全きを斷ずる事は出來ない。若知れりとするならば、それは象を說く盲人のたぐひであらう。

『芭蕉七部集』は蕉風極致の思想、即ち『さび、しをり』と呼ばれるところの、彼の閑寂な風雅を大成した金字塔として有名な彼の選集である。古くから、芭蕉俳諧の眞面目を知らんとするものは、これに就くべしとされてゐる。然しながら この『七部集』ぐらゐ、世に難解の句集はない。かの尾崎紅葉が、俳諧の註釋もいゝが『有明の主水に酒屋つくらせて』といふやうな句にぶつかるのでギックリすると嘆じたのも、此『芭蕉七部集』ではなかつたか。『七部集』の俳諧を指して『萬葉集以後の日本の詩歌の關所』と呼ぶのもまた當然である。從つて古來、多くの俳道の旅人によつて、いかにあまたの此『關所』案内記が書かれた事か。曰く曉臺、蘭更、鶯笠、何丸、曲齋、等々その註釋書は、恐らく十指に餘る程世に出てゐるだらう。が

果してこれらの古註かよく芭蕉俳諧の『いのち』を世に傳へ得たか。思ひを俳諧の中にひそめて、その底に流れる生命を把握し、眞に詩歌の精華を發揮してこそ、その鑑賞は正しい。然るにそれら古註の多くは、こもすれば古歌や古事の典據を尋ね廻つて、徒らに故訓的な解釋にのみ走り、詩歌の何物であるかを忘れ、俳諧とはさながら古事や古歌やを心とした謎々でもあるかの如き感を、讀む人に與へてゐる。かゝる古註書によつて、俳諧の『關所』の闇に、戸を敲く術もなく迷つてゐた俳道の後進にとつて、幸田露伴先生の『冬の日抄』及び『春の日曠野抄』の上板は、實に曉の鷄聲である。

古句評釋に二つの行き方がある。假に名づけて、智的解釋法、情的解釋法、とでも呼べば呼べる種類のもので、一はその態度が物知り、よく云へば學者的であり、一は詩人的それである。前者はこもすれば穿鑿に陷り易く、後者はまた時に主觀に傾き過ぎる。穿鑿が詩歌鑑賞の上に二義的なものである事は云ふものでもないが後者のそれも、その人の創作として見てこそ價値あり、古句評釋と呼ぶべくあまりに遠すぎる。共に評釋としてめでたきものとは云ひ難い。眞の評釋とは情智一如、その交叉線上に立つて行はれてこそ始めて成る。卽ち學者にして詩人、この二つを兼ねそなへた人物でなければ立派な評釋家とは云ひ得ない。しかも俳諧の如く多人數の連吟によつて一卷の情調をつくる特殊の文學にあつては、その又評釋家に、一座を捌いた人物と同等の見識、或ひはそれ以上の力が必要である、何故ならば一卷の首尾を貫ぬく一つの趣きを味はふには、よくその間の消息を洞察し得る力がなければならないからで、その一卷に溢るゝ氣勢を無視しては、俳諧評釋の意義をなさない。これだけの條件の備はつた評釋家を現代に求めて誰があるだらう、幸田露伴先生にして、始めてその人を得たと云へやう。私が先生の近著『春の日曠野抄』及び舊著『冬の日抄』を推して、近來の名著となす所以も、實にまたこゝにあるのである。

『春の日』は蕉風が客觀味を加へて來た一轉期を示す句集として、卽ち蕉風發展の過程を物語る重要な句集として、『七部集』中、前集の『冬の日』及び後集の『曠野』と對照され、最も興味を持たれてゐる佳篇であるが、古くよりその選者の誰であつたかゞ問題とされてゐる。ある人はこれを荷兮と云ひ、諸說紛々たる中に、先生は敢然としてこの書の始めに、芭蕉であると斷じてゐる。先生の『春の日曠野抄』は、實に先生の此見識によつて、新しく幸田露伴の手に捌かれた『春の日』又は『曠野』の感ある快著である。先生の解を求めるや、古註の多くを參照され、婆心に過ぎたる、或ひは無用の解はこれを一蹴し外は古事古歌にまでその蘊蓄を傾け內は字句の末にまで考察の眼を沈めて、歸納的に新しき解を樹しられ、ゐる。『なら坂の

既に前著『冬の日抄』に於いて發句、脇、第三、第四、月花の定座、揚句等、一卷の首尾を構成する上の約束に就いて說かれた先生は、この書に於いては、轉じて前句とのかゝり、變化、緩急等の付け味より、更に進んで、にほひ、ひゞき等の蕉風俳諧の藝術的要素の那邊にあるかをまで說かれてゐる。然しながら、先生の眞面目を發揮したものはこれらの方面の叙述よりも、一座の空氣に對する詩人的觀察の表現にある。實に『曠野』の一卷こそは、先生のその詩人的面目の縱橫に發揮されたものとして、この書中津々として妙味盡きざるのところであらう。『曠野』は蕉風俳諧の集大成として、完成されたる芭蕉の藝術境を窺ふべき選集である。この集に於いて殊に私の興味をひくものは『虛栗』の編者、基角と『春の日』の編者越人との唱和になる『大津壓』の卷じあるが先生の筆はこの兩個の才人の虛實を盡した對座ゞ描いて、特に妙趣溢るゝものがある。彼打てばこれまた打つその塲の樣を、さながら眼前に見るが如く活寫した靈筆は、これこそ俳諧に『小說味、戲曲味』を知る先生にして、始めてなし得るところではないだらうか。紙數ゞ持たぬ私は、まだこの集の內容にまで言及はずして筆を擱かなければならない。然しこの書の如きは、說くべきものではなく、味はふべきものである。何ぞ私如きものゝ喋々を要しやう。その眞價はよろしく繙いて知るべきであ。以上蕪雜の言を弄して、先生の愚笑を購ふ無くば幸ひである。

『卷』名殘の表十句目旦藁の『こは魂まつるきさらぎの月』を評して、前句とのかゝりより、この句を或は書寫しの誤りではないかとして、『子の魂まつるきさらぎの月』又は『まかるきさらぎの月』等ではなかつたかと、そこに疑ひを殘されてゐるなどの如き、先生のこの書に於ける註釋態度を窺ふに足るよき一例であらう。こゝ云つて先生の註釋は、徒らに穿鑿にのみ走つてゐるものではない。詩は會得すべし、解了すべからず。これを會得すれば、全く神味を領し、之を解了すれば、却つて靈氣を失ふ。こゝ先生は云つてゐる。蓋しこの言の如きは、先生の註釋にして始めて云ひ得るの言であらう。芭蕉の俳諧に於ける企圖は、西行の和歌俊成、宗祇の連歌、外には杜甫等の詩の庶民化にあつた。從つて彼の俳諧には、それ等の人々の心を心として、時にかれ等の作品をそのまゝに一轉して自家藥籠中のものとしてゐることが無いでもない。かゝる背景を有する彼の俳諧を味はふのにその背景を知らずして、誰かよくその眞を會得し得やう。芭蕉俳諧の難關は實にこゝにある。會得とは反射である。反射は了解の上に置かるべきものであつて了解なしに說をなすことは、わづかに主觀の塲合に於てのみ許されべきも、この古句の解釋の如き塲合にあつては、何等の用をなさない。卽ち先生の註釋は、この會得への豫備智識としての解であつてこの書の眞の目的は蕉風俳諧の構成並びにその精神を傳へんとするところにある。

本社吟行

叡山から疏水へ

西本三笑

五月六日午前九時、京阪大滿橋停留場前に集まつた二團は、路郎先生、二柳子万よし、ひろし、加香、亂耽、赤埴探偵社主赤埴秀吉の諸氏と二柳子氏の令閨母堂令閨令孃と私の一ゴロスの十二分の一人。帽子を令夫人に置いて來た、万よし氏は停留場前の白木屋で初夏の香り高き麥藁帽子を購入に及び『脊の低いわたいは見失はれてはならんさかい之を目標にすべし』と軍隊口調で一行に命令する。

滿員のローマンスカーの人となり、路郎主幹は週間朝日を手に腰をかけ、ひろし君はその横に前夜の疲れをクッションにもたせかけて氣持よさ氣にローマンスの夢でも見てゐるらしい。左り黨の勇士達は乘降口の近くに新聞紙を敷いて『白鶴』の一升瓶を傾けはじめる。窓外の風景よりも盃の方が大切さばかりに、呑む程に歌ふほどに、例に依つて景氣のよいところを見せてローマンスカー一車内の注目の的となる。

三條終點から市電で出町柳に出で、叡山電車の停留場に着くと、塊人君が鳥打帽を冠つて人待ち顔に立つてゐる。『美しいお連れでも御待ですか』と聞けば、『何も當てがないんだ』とのことに、一行は誘惑して叡山へ曳上げる事にする。叡山電車に乘れば正午十二時のサイレンが鳴る。

萬よし君は此處へ來ても商賣を忘れず自前の酒を盛んに一行に强いる、萬よしの出張所は無く、肴なしに空腹へたゞ白鶴を流し込むのみ。程なく八瀬遊園地に着き西塔橋からケーブルカーに乘り叡山に登る。有名なケーブルカーだけに眺望絶佳、遙か下には京都の街が霞み、音するものはケーブルの響きのみ。

足弱が何ぞ願ふか比叡まで　加香

終點より登山の善男善女、混つて四明

ケ嶽に登る。聞きしに優る峻阪に肥つたひろし君第一に悲鳴をあげて籠で登るモダーンお輕を見ては羨むこと羨むこと、四明ケ嶽に着いた頃には一同へとゝ〳〵となり、絶頂の空腹をおぼへながら、日本一の琵琶湖を眺めて、通人朝陽君のステッキの先に從つて、あれが唐崎、あれが沖の島、あれが大津市、あれが比良山と指さゝ、儘に滋賀縣を一望の下に集めて天下を取つた樣な氣になる。

ゆびさしたところへ唐橋長く見ゐ　朝陽
唐橋がおもちやに見ゐて面白し　ひろし
辨當屋硬派が出來て賣りそこね　亂耽
望遠鏡晴れたときには見える筈　同

寫眞屋の桃割美人にひろし君がからかつてゐる間に、捕虜になり、應接に出た二柳子君が一圓に値切つて支配人振りを發揮し、とう〳〵將門岩ケ背景に記念撮影をする。一同空腹ます〳〵甚だしく『こんな顏を寫眞にするのこそ良い記念』と亂耽君が言ふ。それから明治節記念堂建設標へ向ふ途中で鶯を聞く、

（寫眞）前列向つて右より赤埴、路郎、朝陽、二柳子、同令孃、三笑、後列向つて右より萬よし、加香、塊人、ひろし、亂耽、二柳子令閨母堂、同夫人

鶯もい、が書食ごこでする　亂耽
と亂耽君が一句出す、そこで氣の早い先廻りの廻天堂君に邂逅し一行空腹を忍ひながら元氣百倍して戒檀院を經て根本中堂に着く、

釣鐘の只で撞けると思ひきや　亂耽
すき腹にもう中堂の屋根が見ゐ　二柳子

始めて根本中堂に參拜した人達は目の下に見へる千年の法燈を掲ぐる内陣に驚き有り難や又あみかけの紐をとき　塊人
千年の法燈暗くのぞかれる　同
萬よし君が交渉委員となり、僧堂の精進料理を一行に供給することゝなる酒も候と小僧が持つてくる　塊人

僧堂で酒を忘れて飯にする　三笑

『ナダサカリ正宗』といふ無名の銘酒を出さゝ、上戸黨の朝陽、萬よし兩君は『こんな所にでも正宗もある酒落しろ』と云ひながら一口呑んだが流石の兩君も口へ入れたが、咽喉へはやれず、吐き出すにしては勿體な過ぎ、互に顏を見合せて物をも言へず悄然として盃を置く。

いつはりをまざ〳〵見た酒の味　路郎

亂耽君は鮪の刺身があると思つて喜び勇

んで一口頬ばると、豈はからんや人蔘であつた。考へて見れば精進料理刺身のありさうな筈がなし、路郎主幹こ赤埴氏は浸し物のほうれん草の砂をべつ〳〵こ吐きながら『砂か菜か菜か砂か』こ言ひながらその法味を十二分に味はふ。斯くの如き珍味を前に私は八杯御飯を代へて一同を驚かしたが、このくらい甘い御飯は生れて始めてゞある。但し腹の空つて居たことも大いに味を増したらしい。千利休の故事を思ひ出した。

別室に退いて、山上山下の風物を眺めながら句三昧に入る

下山する方はうぐひすを直似　萬よし

ケーブルカー前を大きく鳶が舞ひ　廻天堂

歸途は道を換へて坂本へ下り、日吉神社に參拜後、自動車で坂本棧橋に着く、唐崎丸で三井寺下に上陸し一行疏水下りの船に乘込む、時に午後六時半

三井寺の餘韻も聞かず船に乘り　亂耿

船中で叡山迷酒『ナダサカリ正宗』二合瓶一本を順次一同に廻せば、今度は燗冷しの爲めに味を非常によくし『ナダサカリ正宗』が此の船中で始めて名譽回復に及べば、一同舌皷を打つながらラストベビーをかけて、亂耿の『モダーン式流行歌』万よしの『義太夫』朝陽の『謠曲』ひろし君の『ほこりにゝき』加香君の『長距離電話のやうな洒落』私の『山中節』なぞ隠し藝共演會を開く、路郎主幹は孫の嗓やぐのを見てゐるお爺さんのやうに、顔の皺を伸ばしたり縮めたり。大藏大臣橋本二柳子君は例に依つて例の如く默々こして居られる。

斯くて京都滋上に着いたのは七時半。それより圓山公園あけぼの亭の句會に臨んだ。

疏水下り默つてゐるに腹がへり　廻天堂

川柳雜誌の殘本をお頒ちします

「川柳雜誌」の殘本がまだ少し本社に殘つてゐます。欠本があるために合本が出來ずに御困りの方は此際至急本社事務所（大阪市住吉區杭全町六〇三川柳雜誌社事務所）宛に御申込み下さい、特に左の値段でお頒ち致します

第一、二、三卷各號　各一部　金拾錢
第四卷　各號　同　金拾五錢
（但し第一卷第一號、同九號。第二卷第十號。第三卷第二號。第四卷第一號は欠本）

川柳雜誌合本特賣

本社では新しい讀者諸君の御希望に依り合本を作りました、總布製美麗表紙附（金文字入り）で書架を飾るにふさわしい簡素な裝禎です。此際左の値段でお頒ちします。本社事務所まで御申込下さい。

第一卷及第二卷　各金五圓也
第三卷及第四卷　各金參圓也

募集句

馬

森東魚選

かへり途馬もねむそな唄で來る　里十九
來る馬に行く馬轡握られる　觀月
支那馬の長さ程野の遠さ　北仙
大陸の姿に町醫者驢馬で來る　草明
青銅の馬の背で鳩遊んでる　將兵
馬市を笑顔で出るは賣られた奴　ひさし
村芝居氣の毒そうに馬に乘り　庄二
騎馬巡査今日はいつもの顔でなし　鐵洲
ほんやりに見た馬車挽き金を貯め　耕民
痩せ馬に荷の愚痴になる子澤山　一風
渡し舟馬がおびえる渡がたち　白鷗
坂の下いつものとこで馬はすね　眠聲
小さい手が神馬へ豆をあけてやり　孤舟
鞭を打つ馬子案内に智慧はなし　幸泉
石ころを數へる樣に馬歩き　糸柳
幼稚園もしく牧場に小馬が居　太路
電柱をかむ馬飯屋から叱り　正春
一と鞭ちに馬の泡かむ坂となり　穂波子
馬の名がわかつて競馬面白し　新水
からりつと晴れて競馬の砂埃り　箱八
除隊の白馬にも言葉かけて出る　一笑
附馬の仲居は頼りなく歩み　陽亭
スリツパのように芝居の馬の足　夢一佛
顔面に馬力のかゝる茶腕酒　扇山
峠茶屋馬やれ〳〵の息を吐き　三次
突當る樣にフイルムの馬は消え　白柳
馬子何か夜道を馬に話しかけ　琴人
ゑけつない香で通る騎兵隊　曼平
うと〳〵とう〳〵と馬蠅に覺め　町二
熊谷の馬は十文の足袋をはき　廻天堂
妙御前の馬で來る日の麗らかさ　晃卓
賣られゆく廢馬へ秋は寒くなり　重陽子
遊牧の頃思はせて驢馬が鳴き　無苦知
馬の尻叩いて今日も酒が飲め　志郎
坂の馬嘶じや〳〵と云ふ姿　京郎
大聲で馬力子供を追ひ散し　玉仙
馬と馬鼻を鳴らしてすれ違ひ　賀名芽
古里へはら〳〵させて馬車はつき　同
重荷ひく馬の努力を腹に見る　柳秀
寢轉んで讀む新聞は馬にされ　同
新兵を震ゐ落して草を喰ひ　呵々子
桃割の姉にお馬になれと言ひ　同
お叩顔する樣に重荷の馬は過ぎ　雷相
山彦を追ふて蹄は通り拔け　同
騎馬巡査二階の人を見て通り　吐露樓
馬の頭輕く叩いて云ひ聞かせ　同

川柳家の戸籍調べ

□　係　ひろし生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

お馴染の戸籍調べを引きつゞき掲載致します。御照會申した向きは左記へ御返事下さい。

大阪市南區安堂寺橋四詰　安井寛宛

(177)　宮本銀砂子

(一)宮本榮次(二)銀砂子(三)映二(四)金澤市榮町一番地(五)明治三十五年六月十九日(六)八百物乾物　七)のんびりとした句風が好きです所謂革新の句の中にも感銘を得る句がいくらもありますが餘りブロ振つた句は嫌いです(八)顔だけの美しさで無く、姿体美のある女、年は二十から七八までの中肉がよい。四肢の均正臘の潤ひ、うなじの白さ私は主としてこんな所に女の美を覺えます(九)お前の自

坂道の馬子憎くらしいものにされ　惡源太
馬子の背を押してる樣に馬歩き　同
踏切でひよいと驚く馬の息　春公子
兵隊の馬だ幸福そうな艶同　菱明
つけ馬の路次の口では承知せず　同
驢馬の耳赤い夕陽に染まるなり　同
空馬もまぢつて木馬廻つてる　南天
騎馬巡査さがれ〳〵と尻を向け　同
馬小屋ガランと明いていゝ日和　青歌
家近い手綱は馬へまかし切り　同
馬馬馬やつと騎兵が通り切り　休歩
小供へも馬から片手上げて過ぎ　同
人垣を弓なりにする馬の鼻　光路
上り坂馬首を振り首を振り　同

青草へ馬をつないだうららかさ　鮎美
判取が馬の背中に重くゆれ　同
騎馬旅行馬迷惑な日が續き　同
山道へかゝると馬子は唄になり　水聲
ロケーション馬の女優の嬉しさう　同
立つたまゝ居眠つてる馬の顔　同
(佳)號令を馬の奴めが聞きわけるやり切れぬていで痩せ馬水を飲み　雷相
見て通るみんなが馬に肩をもち　泰平
乘馬服確かに乘れる姿なり　梢雨
散策に乘馬の夫人見つくされ　町二
(人)新兵の馬にも蹴れた手紙が來　正春
(地)河岸の霧繪になつた馬車が來る　三次
(天)日曜日今日は馬丁乘り廻し　草明

貰ひ子

貰ひ子の今日しんみりと聞かされる　鮎美
絹夜具の中に貰ひ子よく眠り　同
活動の筋へ貰ひ子涙なり　寂郎
貰ひ子が親を怖るやうになり　革郎
貰ひ子の母とは見ぬふさなり　北仙
貰ひ子を日暮頃から持てあまし　同
金の番さすに他人の子を育て　杏人
貰ひ子は姉を寫眞で見る許り　赤城
伯母さんと呼ばれて里の母は泣き　雪峰
貰ひ子と知つてか可愛い氣兼る　將兵
物心ついて貰ひ子氣がよはく　眠聲
出世はしたが淋しい義理の親　一風

佐々木三福選

貰ひ子と知らず似顔の事を言ひ　耕民
貰ひ子に當座寢られぬのも嬉し　德十郎
貰ひ子の今日から變る髪かたち　白鷗
弟の意見に決める義理の兄　水聲
貰ひ子を育て上げたる甲斐もなく　幸子
一周忌子の兄の子を育て　與詩夫
父に似ず母に似ず貰ひ子の噂さ　吐露樓
貰ひ子へみつちり仕込む黑い腹　太路
貰らはれて小母さんが出る其當座　風柳坊
貰ひ子のそれから野原好きになり　惡源太
本當の親に逢ひたい春になり　穗波子
貰ひ子の今日から名前呼へられる　新水

信のある句を言つて見ろと言はれると、直ぐ口をついて出る句がないのを見ると、いまだ修業の最中か上達の見込ないのか不甲斐ない話です(一〇)讀書、旅、寄席行き、觀劇、微醉(一一)なし(一二)西洋心醉者、雨天、梅干、きざな青年、矯風會(一三)新聞柳壇で川柳の味を知りつゝあつたが句會に初めて出たのは大正十二年の金澤川柳會創立當時。初めて作つて初めて地位に拔かれた句が「二心よ辻占は丸められ」今思へばあれが病み付きだつた。

(178)　安井八翠坊

(一)安井清助(二)八翠坊(三)箭流、鹽水亭、泰居庵等あるも餘り用ひず(四)廣島市鐵砲町泉邸前(五)明治十六年六月一日(六)當時浪人(七)所謂傳統派の中に澤山あります(八)睫が長く細面で勝氣の女髪は和洋何れでも好し但し丸髷は不可。(九)まだ一つもありません、今後も怪しい(一〇)芝居と讀書(堅くるしいものは御免)(一一)有(一二)韮(女房でも之を食つたら離緣することになつてゐます)生の葱、氣障な人(一三)明治四十年頃

子を貰ひ俄に老けた氣にもなり　狸庵
貰はれて行く子の父は洟をかみ　春公子
貰ひ子の肩にそぐはね脊負ひ箱　八同
ひねくれた顔暗くする貰ひつ子
貰ひ子のそれから骨の折れる事　九牛
貰ひ子の仲冷かに夫婦老け　伴内
貰ひ子へ入智惠らしい事を言ひ　一笑
明の子貰はれ口を選むほど　菱明
出世してもと吾輩は貰ひ子さ　南天
手輕ふに貰はれて來て孝行者　陽喜亭
お妾の貰ひ子屹度女なり　菊路
弟に訴へられる貰ひつ子　高峰
兄さんと言つてた今日の恥しさ　青歌
貰ひ子へ待つてたやうに生れて來　休歩
貰ひ子はたゞ一筋に育ち行き　丹頂
貰ひ子を中にして寢て背が冷へ　天童
貰ひ子に聞けばお腹が空くと言ひ　一蝶
貰ひ子の一番好きな伯母が來る　翠峯
蔭に身の淋しさ兄の子を貰ひ　無心
貰ひ子を育てても知る親の愛　秀郎
貰ひ子にさんをつけるも女親　重陽子
貰ひ子の眼に白銅貨落ちてゐる　愚陀
貰ひ子の上眼使ふも哀れなり　泰平
いつとなく知る身の上を淋しがり　突支坊
叔母さんが一圓呉れる貰ひつ子　節二郎
貰ひ子へ遣り渡るほど金が出來　曼平
貰はれて行くも知らぬ子の無邪氣　將軍星
お隣の子に引合はす子を貰ひ　町二
貰はれて行くを知らず汽車に乘り　鬼三
貰ひ子の先づ母親へなつきかけ　一助坊
貰ひ子の國のなまりをおかしがり　無苦知
貰ひ子が出來て手柄も地味になり　一舟
貰ひ子は母親の味も知らで延び　信一
灯がついて貰ひ子急に淋しさう　苦香瓏
青春の日を貰ひ子のおとなしい　露斗
貰はれて牛乳の味父母の味　同
貰はれて十八年の父母にして　同
貰ひ子は隣の女の子と慣れる　逸名
誰れが世話したに貰ひ子へこまされ　光路
貰子にミルク濃い日や薄い日や　京郎

佳吟

貰ひ子を打ち明けてゐる重い床　柳秀
子を貰ひ中將湯を飲んでゐる　鮎美
（五客）極道の意見に實の親が來る　賀名芽
（人）貰はれた義理へ叛かず嫁ぎ行き　善導志
母親の若さ貰ひ子かと聞かれ　鐵洲
（六客）貰ひ子へ除り望が大きすぎ　青水
貰ひ子に濟まない程に落ちぶれて　孤舟
貰ひ子に大震災の覺へあり　吐露樓
貰ひ子に濟まなく實子生みつづけ　雷相
（天）血を分けた中でたゞ日の幾日　花蝶
（五客）由緒あるお丈け貰ひ子の生み親　伴内
貰ひ子の冷たい癖が現はれる　菱明
引きのばすやうに貰子育てられ　無一佛
（五客）貰ひ子はまだ弱く一人ゐる　柳子
貰ひ子の行儀はいつも褒められる　白柳

（179）桑原京郎

（一）桑原貞一（二）京郎（三）京兒朗（四）京都七條大宮東（五）二五六一、六、二九（六）燕皆屋（七）多々「俺は彼を莫迦にしてやろう」「あゝ彼も賣名家だつたのか」其の他にも（八）血色のいゝ丸ぽちや、みはりのいゝ鳩目式中肉下町風の娘かキリリッと世話女房のタイプ（九）？（一〇）ピクニック、觀劇、觀展（？）讀書。SANZA…（一一）無（一二）蛇、腹の黒い奴、掛引、（自他共に）（一三）一九二六、一〇一九二七、壹、卜

（180）實川二葉

（一）實川伊一（二）二葉（三）別に無し（四）港區泉尾中通三ノ二（五）卅六年三月十三日（六）小間物屋（七）道同へば一度に動く田植（八）笠（八）陽氣な癖に涙もろい女（九）未だ無し將來も賴り無し（一〇）アキ性なれど何んでも御座れ（一一）オマヘン（一二）書き立てる程の事も無し（一三）大正十四年の初夏の頃

（181）尾添雷相

（一）尾添來藏（二）雷相（三）峰水（俳句に

(地)義理と知り心へ際が出來はじめ　琴人

貰はれて來た子素直に洟をかみ　町二

もらはれた事も知らずに甘え切り　盧白

貰ひ子は親だと信じ切つて無事　志郎

(五客)人形にした貰ひ子にいつかあさ　寛

選後に

應募された柳士百數十名に上り何れも熱心に思ひ〳〵の方面から作句してゐられるが概して出來上つたものが平面的であつて私の望む處の深みの足らぬ事を遺憾に思ひます尙「貰ひ子」と言ふやうな極く俗氣な課題であつた爲にやゝもすると れらひ處が一つになり貰ひ子をして實子が生れたとか扶養料あての貰子、又は藝者にする貰子など同想のものが可なりあつたが、何れも人の感興をひくには不充分のまゝに終つてゐる、物を眞直ぐに見て之を十七字に纏めた丈では優れた川柳とは言へぬ之に生命を ふきこむ事によつて初めて 生きて來るのでそこに吾々の努力を要する處であります、出題方に就ては社に愚見を申入れて置きました、吾々はもつともつと句に深みを 見出す事に努めませう

(軸)貰ひ子のはや十八を肩の線　三福

手摺

○　山雨樓　選

募集句「手摺」は仲々六ツ敷し 課題であつた中にはそのことを附記してゐられた 方もあつたが、集つた五百有餘句の一つ〳〵を拜見して、その出來榮えの香ばしくなかつた點から考へても確かに難題であつた ことがうなづける、

殊にこの題は三月號で「手權」と誤植されたために、舟の權に解して投句された方や、木版の手すりなどの意で作句された方もあつて何だかそれだけで、はや腰を折つたと云ふやうな氣乘りのしない感じが 一層この募集句の成績をわるく したのではないかとさへ疑はれた。

福田山雨樓
松丘町二　共選

凹んだ盡磨かれる 手 摺 なり　阿形

凭れると二人に動く手摺 なり　失名

などのやうに穿ちを 要素とした句にもつと見付けどころの面白い、巧みな作品が表はれるだらうと豫期してゐたがこれは 失望に終つて

手摺から海を一目の風 をうけ　白鷗

はつきりと手摺の影の長廊下　寂郎

手摺から見る病人へ榮種 咲き　赤城

手摺から見 る 俄 雨 面 白 し　觀月

編物へ手摺の影は 長 ふ のび　翠峯

三階へずつと續いてゐる 手 摺　露斗

使用）その他色々變名していたづらすることもあります、（四）島根縣筑川郡高松村、（五）明治三十三年四月二十二日生（六）農、（七）澤山ありますが是と云つて一等地拔けた句をまだ見當てません（八）二男の父・今更そんな浮氣は出しますまい、（九）滿更無いこともないが發表せよと云はれると「チトこまり」です（一〇）俳句、生花・位なものほんの初歩です、（一一）あり、（一二）白惚家・虛榮家、食物では氷蒟蒻、椎茸（一三）大正十四年八月頃

◆作句向上に資する理想的研究專門機關
◆本機關より生れたる權威ある句集の刊行
◆入會歡迎。郵券封入先づ規定を請求あれ

川柳使命會　生る

大阪市外豐中榮通二丁目
川柳使命會
同　石賀馬行　井上刀三
人　河野春三　黑木莢豆
塚崎松郎

手摺から夜霧に更けた都の灯　寂郎

などのやうに叙景的な句に比較的佳作が多かつた。けれども其大部分は説明の字句、變つた取り合せ、見ねすいた理屈で埋められたものばかりで、造作なく作り放した句がかなり尠くなかつた。

同じ叙景的な句でも

手摺から眺めるは間忙がしい　水聲

手摺で子が這ふてるてハッとする　雷相

のやうに感情なり瞑想なりが相當織り込まれてあると、内容がよほど豊富になると思ふ

同じ造作なく云つてある句でも

手摺からさつぱり見當つかぬなり　觀月

その時は手摺で耳を染めてるた　阿形

のやうに卒直な、生ぶな、純な感じに出合ふと思はず頂戴したくなる。しかも課題を中心としたシーンが無技巧の技巧と云つたうまさを見せてゐる。更に

手摺まで其の嬉しさを持って來る　翠峯

手摺から勤めと違ふ顔を見せ　孤舟

忙がしい袖が手摺へひつかゝり　孤舟

こう云つた句に至ると感情とリズムがよく渾一体となつて、そのまゝ讀者の胸へある響きを與へずには置かない。云はゞ藝術味の多い句である。受取つた感じにそつがない。句が立体的に躍つてゐる。

しかしさう云つたからとて、この三句が川柳の最後のものでは決してない。必ずしも川柳の深さ、鋭さ、フレッシュさを物語つてはゐないまだ〳〵掘り下げ、突き進む境地が無限に殘されてゐる。

課題吟によつて技巧、着想の妙を極める事勿論必要であらう。けれどもよりよき句境を捉へんが爲めには、試驗問題の答案を認めるやうな氣持で固まつてはなるまい。この題にしたところが、想がまとまらなければ自ら手摺に近づき、或ひは離れ、親しんでも見ればなるまい（句會の課題吟は別だが）少くともそうした熱心さ、眞劍さを望みたい。又狹い靜かな境地にあつても、深く鋭く眞面目に眺めてほしい。

更に課題吟に捉はれぬ底の藝術觀を要求したいがこれは問題が外れるから稿を更めたい。偶感であるが、課題吟にうき身をやつしてゐるようでは、藝術としての川柳、詩としての川柳はとても期待せられないと云ふ懸念が、黒雲のやうにわき立つてくるのを覺える全くのところ僕自身、今その黒雲を拂ひのけるべくもがいてゐるのである。

彼岸は遠い。努力が足りない。

○　町二選

頼りない借家手摺をゆすつて見　幸泉

おとなしく子供手摺を行き過ぎ　同

ホネムーン今日も手摺に揃ふなり　梢雨

カリカリ屋手摺の主と瞳が出合ひ　同

手摺をば叩き口笛吹いてゐる　善導志

展望車の手摺へ寄つて蝶を振り　草明
階段の手摺にすがる幼稚園　柳秀
手摺まで出た病人へ菜種咲き　赤城
廻り縁こゝの手摺のよくみがけ　眠聲
ウインドの手摺冷たう光つてゐる　鐵洲
手摺から國はあちらと指をさし　湖山
高樓でのぞく手摺はきつう持ち　青水
手摺からもう逃げられぬ聲を出し　孤舟
手摺からくの字になつて空模樣　叶露樓
手摺からそつと丸めて投る密　狸庵
手摺まで釘うちつける二階借　柳狂
手摺の兒帶もつ手くび拂ひのけ　秀郎
幕合になると手摺に尻を向け　菊路
雨續き隣りも手摺に立つてゐる　高峰
甲板の手摺日本の端を見る　白柳
衝突を向ひも手摺から笑ひ　桃妖子
許嫁手摺に後姿みせてゐる　虚白
ゴム毬は手摺を脱けて道へ落ち　突支坊
手摺ふさみれば煙草で燒けた跡　休歩
鼻かんでしまつた迄の手摺なり　翠峯
カリカリ犀手摺見上げて歌つてゐる　鬼三
手摺まで押して喧嘩は分けとなり　信一
三階へずつと續いてゐる手摺　露斗
病院の手摺頻杖つきなれる　失名
オイ一寸手摺の一人友を呼び　光路
手摺から屆く櫻へ鼻を當て　志郎
忘れた制帽手摺から投げてくれ　京郎
裏二階手摺にかけた赤いもの　泰平
あぶないよ手摺を持つて降りなされ　新水
その時は手摺で耳を染めてゐた　道一
手摺から下のボートに聲をかけ　雷相
よつかゝる手摺へ舞妓拳の眞似　同
ヤアといふ顔が手摺のぞこへ出る　琴人
手摺までよく拭き込んで女住み　同

笑話三捻

池邊生

五月十二日、大阪朝日新聞社主催の天平文化臨地講演會が奈良で開かれた。路郎主幹が此の講演會に出席し、京大澤村教授の「大佛の説明」を聞いてゐるうちに路郎主幹は胴体に何が彫つてあるかと例の研究心がムラ〳〵と這ひ出して、蓮座の上まで上つたが、それでもまだハツキリ見へないので、更に胴体まで這ひ上つて、其彫刻の美に打たれた。大佛の胴体へ這ひ上るとは路郎式だと評判評判

○

五月十四日舟々、新水、翠峯の三君が高知へ行くのにその當日になつて、新水君が洋服を新調した爲めに時間がなくなり神戸まで自動車を走らせたが惜しや汽船は一間程も棧橋をはなれたところ、急いで走つた新水君は遂に轉んで新調の洋服の膝を拔いた、それから歸途の阪神電車の中で新水君膝の破れたズボンを氣にして荷物を膝にして隠さうとすればするほど意地惡く出てくるので閉口し切り、大阪へ歸るや否や直ぐに洋服屋に飛び込んで明日までに繕しとくなはれ……

御打粉
匂ひ入
松風
本舗　伊藤大一堂
發賣　高橋盛大堂
到る所の藥店化粧品店に販賣す

時代川柳大觀異見（二）

西原柳雨

三七三　百人の中に目あかし一人ゐる――頭註に盲人の「密偵」とあるも例の目覺ましの人丸ではあるまいか

三七五　藝者とごら打づたも百のうち――此藝者は蓋し鯰菊どらの下を脱

三七五　百人一首かぢをも一人入れておき――曾根好忠とあるも御鳥羽院ではあるまいか

三八八　無慾の全盛末世へ名を殘し――泰時とあるも全盛等の用語よりして寧ろ高尾と解し此條下から削りたいと思ふ

三九六　あの元氣よう戸塚まで行かうぞい――源左衛門とあるも私は從來高輪邊まで旅立を見送つた人々の詞と解してゐたあの元氣では品川迄しか行けまいとのユーモア

四一四　菊水を夢でほらせる智の深さ――後醍醐天皇といふ解決して不當とは思はぬ併し正雪にも是と同樣の事がある爲迷はされる

四一五　振袖を千早の外へ出して置き――○印を附して千早城の條下に列しあるもこれは振袖に千早を着た神樂巫子なるべければ抹殺すべきではあるまいか

四一七　疳の虫らしい佐兵衛が幼だち――杉本佐兵衛とあるも賴朝の方かと思ふ

四二四　室町の御所は桃さく頃に出來――新田足利の條下に列しあるも是は十軒店あたりの雛市の句として省除すべきではあるまいかと思ふ

四八五　一ッ目を持てば座頭も出世なり――總錄屋敷の句にて勘介には何等緣故のない句であらう

四九八　味噌すりをやめて大阪方へつき――石田よりは眞田幸村とした方が適切かと思ふ

五〇四　おひねりを二つに分けて御味方――の頭註に只賽錢だけでは不得要領どうしても十二銅といふ説明が欲しいやうな氣がする

同　御互に御不沙汰をする諏訪の月――此句がどうして眞田であるか一寸考へても解らぬ

五〇六　片桐がためには茶々の局なり――前後淀君の句間に置いてあるために一寸紛らはしい、實は私も「參尾志」に淀君として大原文學士から茶々は淀の前名ではないと一本參らせられた、とすれば此句はどうなりますか大方の御垂示を乞ひたし

五一四　錢をなげたはかたのない智謀――此錢を六文錢と解するよりは此句を熱田の信長と解したい

五二一　軍配をひつくりかへすおん扇子――唐冠を戴ける秀吉は軍配を持つてるやうにも記憶するが若し又信玄ならこゝの句ではあるまい

五二一　すでのこと御家も京にするところ――此句何故に關ヶ原か、頭註あるべきことゝ思ふ

五二二　諸國へは扇でひびく芝の鐘――五本骨の馬標と解するも

一理あるやうなれど「釣鐘のあつさに扇使はれる」の狂句の如く増上寺の鐘の縁の厚さ扇の丈ある方に解したい氣がする

五五五 傘も下駄も三浦屋派手なこと――此傘は例の尾張公の鼈甲の笠の方ではあるまいか、序に申すが笠を傘と考違してゐる作句は幾つもある

五五六 明け六つを打つとお立ちと三浦いひ――誤字誤植に屬する分は拾はぬ筈であるけれども此六つなどは此儘では意義が薄ひやうに思はる一應原本御調を願ふ私の吉原志には假名であけろくとして置いた筈である

五六〇 松浦寫向いて高尾はしうたんし――の頭註只佐用姫參照だけでは物足らぬやうに思はる此松浦寫は蓋し椎の木屋敷にて「椎の木の方へ向つて高尾泣き」といふ類句がある但し島田は割下水の邊に住んでゐたらしい例證句が二三ある、受出されて芝へ向ふ船の中の句と思ふ

五六四 紅葉狩したのであとは車留――之は仙臺高尾の條下から榊原高尾の條下へ移した方が適當ではあるまいかと思ふ

五七二 おん身請家老は後車をいましめる――是も同じく榊原の方におきたいやうな氣がする

五七五 作者でも鶴は黄金の札がつき――西鶴もさることなれども南北の方が作者の上五に比較的よく適合するやうに思はる但半面には鶴ケ岡放鶴をほのめかした句作か

五八二 御不沙汰の言譯させた名句也――傘借りの意にて其角の夕立に置かれたかも知れぬが矢張りこれは〳〵との吉野山の方であらう「吉野山お久振のやうにはめ」と並べて置きたし

五九六 兼て夜討ときめた蕎麥屋の客――○印附にて吉原行とあるが其處迄突込んで解すべきか疑はしいやうにもある

五九七 隣屋敷でも月見ごこでなし――十二月十四日に列べてあるも是は八月十五日の細川家であらう

六〇〇 下總へ上野の來る運のつき――下總をさくら炭と解してあるも吉良家本所への屋敷替を指せるかと思ふ

六〇五 鷹の騒に雀まで出る所――頭註はなきも前にも後にも芝の仙臺屋敷の句が置いてあるので讀者をして此雀を仙臺の竹に雀と誤解せしむるが恐あるから別所に置くべきであらう此雀は上杉家を指せるものであらう「其晩に雀が出ると鷹も出る」などいふ句もある

六〇四 十四日拔身をしよつて夜道する――是は大山詣であらう

六四二 だなはんを捕つた〳〵と猫が來た――此句が何故に十段目であるか頭註が欲しい捕つた〳〵丈では無論薄弱の樣なればさう思ふのである偖て自分には解らぬとして別に說はない

六五四 時鳥左樣ならばと啼いたやう――千代の條下へ置くは如何、是は例の北野繪馬堂にある左甚五郎の刻んだ時鳥が「鳴け聞かう」の歌に感じて裂帛の一擊を洩らしたことであらう

六六〇 雪の朝鰧居仕事に鴨をとり――此句が掃部頭對水戸齋昭などいふことは頭註がなければとても解らぬ、萬延以後の句か、かういふ句には年代が欲しい

六六二 澤瀉を神農横ににらめつけ――此神農は本郷三丁目兼康の軒にあつた神農であるならば句頭に○印を要し且つ頭註に伊豆倉横町角生藥屋の澤瀉といふ說明が欲しいと思ふ。弊著「川柳江戸名物」御參考を乞ふ

六七六 朝なごはかくの通りと老藥子――寢小便といふ頭註は如何壯者を凌ぐ勃々たる精力ならずや

七〇四 ありがたさ木篇公より御拜領――始皇帝の雨宿りの條下に列しあるも德川家から賜はる松平姓のことゝ思ふ

七三三 桃園の院拜見と生醉來る――此桃園は雛段にて玄關張、三人が盟をなした桃園とは全く無關係であらうと思ふ

七五九 眼をあくと眠る間が五十年――蘆生の條下に置いては不可ないことはあるまいが此「と」は接續詞の「と」にて眠る間がは眠る間とがの略なるべければ頭註に生れてから死ぬまでの間とでもせねば誤解し易いと思ふと同時に此條から消除しても別に差支はない句とおもふ

七七七 樂天も陸路を來ると播磨まで――頭註に播磨の住吉とあるは攝津の住吉の誤にてはなきか

七八五 蚊に喰はれ虎に喰はれぬ孝の德――和藤内の條下にあるも二十四孝の部へ移すべき句かと思ふ（完）

玄戒さんの事ども

―庚戌一日一句から―

蛭子省二

『柳樽研究』誌の卯木追悼號がつき、頁を追ひ、玄戒氏の一文をよむと末尾に、舊臘から喘息に罹つて靜養云々とある、これは初耳、卯木氏もそうであつたが、私も喘息には年々歳々苦悶を續けて居る同病相憐れむの情にたゑず一書を剪て御見舞しようと思つてゐる矢先、一日を隔て三月二十五日朝、御遷化の黑ワク案内がついたとは、人生の無常を泌みぐ〜と感じさせられた。君の昭和三年頭詩は

死の影は次第に濃く我れに逼つて來る
沟に死生透脱、徹底超脱の大往生、遺言もなく又辭世もない、芭蕉が言つたように、一句一詩が全體であならば。年頭詩は大自在の清淨本然の姿である。

喘息は兩三年來の病であつたそうだ、死因は感冒による心臓麻痺と聞く、四十九、惜しい哉。

私は年始暑中の挨拶丈けは交換してゐた、大震災後堂宇の建立―そは伊東忠太博士設計印度式と法隆寺樣式折衷、耐震耐火建造物日本最初の試み―に關しては數回の御通信も頂いた、昨年行脚の際、卯木氏から川柳江戸砂子を上下二册にわかつとして、附錄の年中行事をいかにしようと相談をうけ、卑見を陳べた後に、詞友から玄戒氏が明治四十三年出版の川柳歳事記を大々的に增補されつゝあつて今や殆んど完了に近い事を耳にし卯木氏の事もあり一度久し振りであるから、弘誓院の門をくゞつてみようと、ハマの句莊で五萬石氏にも話した。が私が喘息で倒れドコへも敬意を表し得ず、東京を去らねばならなかつた。砂子の行事は適宜本文に加ゑようとの決心の通信が卯木氏からきたのも、川柳歳事記との重複を、慮つたのである。

漏れ承はれば『川柳歳事記』『謠曲と川柳』『川柳商賣往來』を一時に市場に提供すべく、死の間際まで執筆されてゐたと云ふ事は、決して單なる短詩人ではなく古川柳に基礎を置いた純なる主張であつたので、皮相な批判は君の面目を傳ふる所以でない、當初は歌人であつた最近の短詩をみよう。

日向を追ふてまゝごとの膳を移す
議員候補者のびらを電車の窓から寒く見た
霜にもめげず忍冬の蔓が延びてゆく
食卓についてずらり並んだ子の頭數を算ゑる

私の初對面に就ては『新川柳』誌十五號に

一月十七日(明治四十二年　川柳社新年會初めて石井竹馬君に遇ふた―龍之助氏を除いては皆、左の手紙が來た―翌日竹馬君から初對面の御方のみなるに、何んの遠慮もなく雜談致し得しは―大兄は三十二位にあらせらるゝと想像致し居り申候云々、君は早稻田大學生で瀟洒たる美少年である

と書かれた、此の美少年で後日大笑ひをした事があつた、其後も數回逢つて居り

弘誓院本堂で柳友と晝食の馳走に預つた記臆も存する。

『五月鯉』誌の名譽社友であつた點からも、柳界では最先進、刻苦勉勵行くところ一として可ならざるなき、詩天才でもあつた、師は金光寺信元僧正、その人格に化育せられ！君も亦稀なる、至孝善行の人、寡言よく他の長所を宣揚される宗教的大度量があつたから、周圍には崇拜者が多い、特別の趣味としては、古書殊に川柳關係の書物蒐集で、これが近業『川柳大山みやげ』となつた、遺稿は同志の手で早晩鉛版に附せられよう、その日を翹望するのである。

四十三年庚戌一日一句を常不輕人の名の下に發表された、處々を拔いて卓見と詩想に潤ならう。

一月三日、往昔吾高祖の眞言の宗風を天下に布くや各宗の龍象法鼓を鳴らして之に逼りぬ、己來一宗一派の開創には必ず迫害は伴ひき、去年余の微財を投じて眞言宗施本傳道會を起し篤志の醫家に乞ひて貧者の爲に施療券を發するや二三有力者の之が援護を爲すあるのみ、同門の士にして猶嫉視する者あり慨すべき哉、更に川柳の上に新なる試みを爲せば群俗競ひ起り案山子の弓を擬して、左右に逼る、笑止なる哉、余は余の信ずる所を行ふに憚からず。

梅一輪天下の春に魁けん

一月九日、人の逆境に處して道を行ふは恰かも雨後の嶮々を攀づるが如し、古聖賢の行蹟を見るに皆然らざるなし、凡夫われ旃めずして可ならんや。

坂路へ來ると草鞋を締直し

一月十七日、他を抑へて己を揚ぐるに遑なき世なり之を生存競爭といふ、惡辣なる手腕を揮つて他を排し得々たる者を優勝者、成功者といふ。

春におれが乘うと脇から出

一月二十日、梅の枝に繡眼鳥二羽來り枝を上下して啼く、去る。さらに頰白鳥一羽來りいそがはしく枝をつたひ、やがて辯を喞んで飛ぶ。

出る幕ぢやないと鶯冬籠り

一月廿二日、感化救濟事業は勝者と敗者とを調攝する最良機關なり、彼の共產主義者の如きは夢想を實現せんと努力する者なり、何ぞ三省せざる。

蜃氣樓どうしても往て住むといふ

一月廿八日、午後六時銀杏樹の下に立つて彗星を望む。

年代記繰つていさかふ彗星

二月一日、境内の紅梅やうやく綻び初む

紅梅の二十日餘りを咲き遲れ

二月二十三日、眠られず

人を死に導くやうに時計鳴る

三月四日、柳多留醒刻初篇原稿を一月十四日印刷所に送りしに今日に至る五十日、印刷ならず、爲めに會員の感情を害せしこと尠少ならず。

明後日といつて紺屋にだまされる

三月十日、起きいでて見れば雪積れり

春の雪溫室の火を焚き添ゐる

三月二十一日、（省二日此日玄戒忌となる）

子子の蚊となりて溝に遠ざかる

四月十七日、牡丹櫻咲く蝶の如く終日花の下にさまよふ。

摘草に年增は洒落れて頰冠り

四月二十八日　相知れる若き女逝く

胸に響く柩を閉さす釘の音

君は氷水と西瓜を絶對に口にしなかつた、晩酌二合黨、詩人として宗教家として、その日〳〵爲す丈けの事をなし、寂光無邊の淨土にいられた事は本懷であらう、實に日本川柳史への徹見的革命兒でもあつた。合掌

句　悼

「春の雨芍藥の芽の眞ッ赤なる」の遺句を思ふ、今雨降る芍藥の一莖をきる

…四月十二日…

四十錢の歲事記をみて　豆腐汁　省二

西原柳雨氏へ

―時代川柳大觀異見―

木村半文錢

いつも難句に就て御教示を得てゐることを感謝します。あゝ云ふ解説は、その衝に當つたものでないと、ほんとの苦しみと面白味が分らぬものと思はれます。尚ほ將來の御指導を願ひたいと思ひます今、二三に就て心附いたまゝ、日頃の御恩報じに異點を申し上げたいと思ふのです。

四二　身揚りと出そこな所へ蜘が下り

誰れでも直ぐに野馬臺のやうに感じますが、これは貴解の通り『さゝがに―』の衣通姫が適切でせう、殊に『身揚り』云々の意味を探るなれば……。

四八　我國の耻かしくない歌をよみ

我國―とある以上は、對外的のやうに解せられるから、宗任よりも仲麿の方が可能性が多いと感じます。尤も宗任の歌意を推すと、或は我國の――と云つた處に據り處があるのかも知れませぬが…。

四九　百人の一人綺麗な股から出

これは柿本の方が適解でせう、『九十九人は親の腹から生れ』（寛政）の如く柿本さいふこころに此句の駄洒落が窃むのでせう。菅公であれば、其の根據が淡いと思はれます。

六九　中納言ぐらいをくれるしはい伯父

恐らくは、大納言の小豆から思ひついた、中納言の洒落でせう。小豆か小豆飯でもくれた客い伯父の意味だらうと思ひます。

九五　天神へ飛梅あたごなぐれ也

は貴解の通り年の市でせう『愛宕から平川へとぶ鉢の梅』（文政）

二二五　くゝ馬は時々くらをかへろ

蓮葉な女郎の鞍替だと思つてゐましたが、將門とは少し肯くことが出來難いと思ひます。

一六六　五百から一躰ぬけて人にすれ

これは芝居の羅漢臺でせう。『近すぎて穴が知れると五百云ひ』（寛政）『五百人蟲の背中を見て歸り』（安永）其他類句が多いと思ひます。一躰は一人を洒落て云つたまでゞせう。

一七三　鬼の手を互に出して酒をのみ

大江山だとすれば『互に』が可笑しい之はやはり貴解のやうに拳でせう『如來さまつんとさんなの御手つき』（明和）『けんを打つ仁王は五で釋迦は三』（寛政）なぞが、或はそれでないかとも思ひます。

一九五　大さわぎ鬼ふり袖が二三人

鬼ごつこの句だと信じてましたが、それは鬼の處で切れて、以下『ふり袖が…』と續けて句意をさう解してゐたのです紅葉狩だとすれば、二三人が可笑しいと思はれます。

二一〇　元日に大根一切れ食たまゝ

恐らく『幇間』でせう。

二三三　後から招いた扇毛受なり

貴解の如く清盛でなしに、熊谷でせう卽ち、『毛受』は蓮生坊たらんとする句意の根據であつて、清盛なれば、既に毛受が響かなくなります。殊に『後ろから―』は直ちに熊谷を連想せられます。

二四一　申に手をのばし足をば亥に

申は蚊帳の釣り初め、亥は爐開きでせう。申の日に蚊帳の釣初めをすることは可なり舊くから行はれてゐる慣習で、庚申とは必ずしも限つてゐないらしい。そして申は去るに通じ・蚊を去る…の迷信から出たことだらうと思はれます。亥の方は『亥の日から猫の居所高くなり』（寛政）で炬燵が直ぐに分ります。

二八九　信濃者だけ大軍をくひこゐる

これは義仲より無論眞田でせう。

三三三一　熊坂はのびを打たが落度

のびは伸びであつて『寢床の中でのびをする』といふ風の、意味（句意ではないゐ）だらうと思つてゐます。それで原註の『愚圖々々』は少し不安當でせうが、それに近い意味が通ふものでせう。

三三三一　盜人は虎と熊とで名が高し

得知翁の時代狂句選には、虎王熊坂と立派な解がある。併し、この虎王は何處へ出た盜人であるかは分らないですが。日本にあることはあつたのでせう。

平塚情調　附大磯

—平塚支部創立の後で—

平塚支部　酒井駒人
東京支部　檜山千代二

◆公用の爲め横濱へ立寄つたのが、思つたより時間を要し、平塚支部創立句會場へ乘込むだのは夜の八時十分、市街自動車は一本街を走つて居る、レザー張のお尻が板につくクッション、七人滿員、金切り聲の車掌コンバクト愛用の女性によりごこも同じ春の灯をぬけてゆく（千代二）

◆東京支部からはきて吳れないので、大にアテはづれであつたが、平塚の第一句會としては成功、四題をものした頃、千代二兄がポッカリ顏を見せた、實に勇氣百倍、十一時過ぎ散會して同兄に一泊を乞ひ、翌日は一緒に海岸へ行き、今を盛りの桃の花をみせたら都會人は珍らしがつてゐた。上平塚溫泉で晝食、三時間許り寢轉むび、相撲の山々を眺め柳談をした、句も作りました、家に歸つても興

盡きず、夜九時發で見送つた。平塚の名は千百餘年前延曆の頃、政子の方が東國下向の砌此の地でなくなつた。塚を築き松を植ゆ、要法寺境内にあるもので、塚の上が平であつたから平塚と傳へられた（駒人）

◆その昔は大磯が歴史的に有名であるが、新興平塚町は遂に大磯を併呑して小田原と市制を爭つて居る彼れは傳統の潛勢力あり、是れは經濟的の實勢力がある。即ち相模紡績、關東紡績、海軍火藥廠、近くに兵營設置運動も開始されて居る、平塚町民の意氣は茲に早晩結果をみねばやまぬ。此際平塚柳壇が擡頭したのも、決して意義のない事でない。寛永頃は村その後平塚宿、平塚驛、明治二十二年町と改まつた。（千代二）

◆ナイトレス、オールド夫れは別個の話題としても、平塚は女により發展が醸醸された事はいなめない、日曜には紡績の女工が青白い顏をして歩いて居る、お國言葉丸出しで吳服店のウインドウや活動の看板をみてゐる、だから化粧品店も

かなり多い。それに驛から十數町隔れた女學校への通學が、皆自轉車で列をなして居るのは、一寸他でみられない光景である。（駒人）

◆娯樂機關としての二つの映畫館のフアンが、近村から遠乘の自轉車できて、六七十臺も揃ひしゐるなどは、寧ろ奇觀である、日活松竹のスター連も、よもや想像だも及ぶまい、女子自轉車愛用熱の旺盛は、二本足で歩いてゐる丸髷マダムなど時勢遲れの感があり、東京からやつてきた私は椋鳥の樣に思はれはせぬかと氣がひけた（千代二）

◆名所とてはない。從つて名物もない桃園は湘南隨一人出が多い。桃羊羹はうれる、何しろ海岸に近い町であるから、海水浴か書入れ時季・夕カ麥ワラ帽の都人が町をそゝり歩く頃は、眞の平塚情調であらう。カマボコは美味である、それに平塚驛は大山登りで賑ふ。今では小田原急行電車の爲め客足の減つたのは止むを得ない、馬入橋は一昨年開通、渡るとと茅ヶ崎。（駒人）

◆小さいお稲荷さんが、餘りに多いには無信心な私には妙な感がした、大山箱根の連山を隨へた富岳が、馬入川の向うに英姿を仰がせてくれる。春の平塚はよい所だと思つた、晴々した一日であつた下界は菜の花に雲雀かないてゐる。（千代二）

◆大磯は松本順先生の海水浴効能唱導から、驚異の繁昌をなし、洋食玉突藝妓小料理屋ないものなし、海水浴旅館數十軒、別莊は山の手といはず、町といはず軒並み、俗化でしようか。鳴立澤の西行堂は驛から約五町、延臺寺本堂には曾我兄弟の木像、境内に虎御石、十郎之硯水は足に力を入れたら穴が出來て、水が湧いたと云ふ、あの鎌倉時代に遊廓のあつた化粧坂には、今尚ほ二軒殘つて昔を偲ばしめ、虎の化粧井戸の噂も聞く、化粧團子を賣る茶店に腰を下ろす、花水川そして花不見橋・頼朝が花見に來た時には既に散つてゐたからだと。川柳雜誌關係の方々が平塚を素通りされない事を望む、此附近一日の眼福を得るには充分だ、平塚句會の發達のため微力の奉仕を續けよう。（駒人）

◆平塚柳町鷄辻塲に眞譽慶言信女の碑がある、これが劇に仕組まれた加賀見山お初の墳墓、卽ちお初尾上岩藤とは山路瀧野澤野の事享保の頃松平周防守に仕へた局で。澤野に奥方の面前で恥しめられた事から、澤野（實名みち）は死を決し遺書を召使の山路（實名たつ）に持たせて母のもとにつかはす、山路は主人の顏色常ならざるのをみ、途次足がしびれて歩む能はず、剩へ主人の姿が幻の如く現はるゝので、急いで歸へりみれば自害の後、直に懷劍をひつさげて澤野の部屋に入り、主の仇をうつ

古川柳には

二大家の忠　竹に乳母　梅に下女

下女の大關湯殿山　鏡山

鏡山下女が譽れは天下一

天下一は鏡の事「くもらぬや月のかゞみの天下一」長吉（駒人）

往診と來診

岩本素人

病人の樣子が急に更つた樣で御座いますので、恐れ入りますが、すぐ御來診を病家から言へば『來診』である。

先生は只今往診でお留守ですからすぐ往診先へ電話をいたします。

と看護婦が言ふ。醫者の方から言へば卽ち『往診』である。こころが何時か琴人君の言つた貸家と借家の問題の樣に、世間では往と來とを混同してゐる人が少くなくない。

此の間、本社神戸支部句會で、はからずも『往診』と言ふ題が課せられた。私は『醫者が診察に往く』と言ふ題意と解し且つ作句した。

往診はクラブで球を突いてゐる　素人

開業早々まだ間の無い醫者、午後一時より往診と掲示はしたものゝ往診を賴みに來る病家はなし、午前は家中の下駄を玄關へ並べたり親類から『サクラ』を賴んで來たりした。午後も矢張り世間の手前往診と見せかけ、新しい自用車で景氣よく出るは出たが、お見舞と梶棒を下させる家は一軒もない。今日も亦クラブでゲーム取の小女を相手に球を突いて時間をつぶしてゐる。

と言ふ積りだつたが、此の句は沒になつた沒になつたは不思議ではない。選に入つた句はそれ〴〵此句以上の佳句であつたから。

佳句ではあつたが、其の多くは往診の句ではなく來診の句であつたと記憶する何れ本誌の各地柳壇へ發表される事と思ふ……言ひ遲れたが選者は神戸の東洋鬼氏であつた。

選者の軸吟は

往診に折のさしみの事も言ひ

流石は東洋鬼氏洗鍊された良い句だと肯かれる。だが此句も往診ではなく來診とあるべきではないかと思ふ。

雅號に就いて

大連　早坂北仙

雅號とは多くの場合、畫家、文士、音樂家等の、藝術にたづさわる人々が、藝術上に用ふる謂である。これを先づ文壇より求むるに、森林太郎氏の鷗外、島崎春樹氏の藤村、巖谷季雄氏の小波、厨川辰雄氏の白村、子規、虛子、獨歩、秋聲、白鳥、雨情、白秋氏等々此に枚擧の遑がないが、一管の筆、能く雅號より想起する、個性の微妙に觸れてゐるやうに思はれてならない。

古來名は實の賓こいひ、或は名體不離と唱へられても名と實とは一にして二ならざること甚だ多い。殊に雅號と實物とは、一體不離の連鎖でなければならない

本名は親の慈愛による命名であり、多種多樣の意義が潛在してゐる。が雅號は長ずるに及んで、各の自覺に促され、それ〴〵の方面に對する、理想の象徵とも見做さなければなるまい。故に雅號は雄壯にして、典雅、且つ、優美、穩健な文字を、選んだものと思はれるからである。

大正より昭和の文壇に、本名乃至本名に近いものを選むことが流行してゐる。

例へば寛、潤一郎、吉二、和郎、有三、健實篤、信一氏と言つた風なものであるが之れも各人の自由であつて、その眞摯な點を見逃してはならない。

斯ふした眼を柳壇に移して來ると、奇想天外變名駄名、百鬼畫行の狀態である何故に珍名を自らが選び、洒々として川柳に直對しなければならないかと言ふに川柳を自らが疎み、浮世三文の道戯役者としてである。

川柳は大部分が非詩だ、他の文學の企及し得ない所に特色を持つと言つて、超然としてゐるが、他の文學が可笑い。皆がそれ〴〵必然性の出發し、一本の腕に五指があるやうなものだ。その五本の指は各々特異點をもつてゐるが、それは同一バランスにて秤るべきではない。詩はすべての人々に同一の感情を呼び起し、生活の利害のために、離れ離れになつてゐる人々を結合する、この同一感情を絶ねず繰返すことによつて心情が持續して行く、先づ詩としての特異點とも見るべきはこの邊にある。詩の指はその特異點を握るのだ。最近私の讀んだもので、面白いと思つたことに、偉大から生れた大茶目のミケロ、アンジェロは、或日キュピットの像を作り、故意にその一方の腕を折つて、いかにも古代の作品のやうに見せかけ、ひそかに、近いうちに發掘される筈の地中に埋めておいた。さて、いよ〳〵發掘が開始され、土工の鍬先にすくひあげられた像を見た人々は驚いて、批評家に質した、批評家は古代稀有の名作と激賞したため、某僧正は大金を出してそれを購ひ早速アンジェロを訪ねて貴下は何人の作と見らるゝか、何と古代の名作では御座らぬかと誇らしげに語りながら、今日手に入れたまでの苦心を話したときに、流石のアンジェロ、僧正の眞面目さに、おかしさ餘つて吹き出したと言ふ一節である。既成だ傳統だと火花を散らす川柳家達よ、翫味する程この一小事が微苦笑の種ではないか。

先づこの邊で前項に續けて、異彩ある珍名、奇名を机上二三の柳誌より抄錄して見る。

餡ん坊、あき坊、赤ごん坊、机閑坊、餘念坊、孤馬鹿、はてな、兎ん馬、唐變木、喜多八、珍竹林　等々

蹣跚として陸續する。

宛然世紀を隔てゝ醉ごれの罵り合ひを聞いてゐるやうな氣がする。

要するに茶番は、素面で人前に出られないと同じやうな心理の下に、川柳に對する川柳作家の態度であらうが、人を馬鹿にした現實である。

私は是に一面識もない諸賢の、雅號に對する罵倒を快よしとするものではない只文字の上から感じた不快さに過ぎないことをお斷りして置くが、慨して雅號と作品の價値が並行してゐる點も又一考して頂きたい。

笛村と言ふ俳人は雅號を印刻する塲合字の釣合をとるために笛童と改號したことも話題になつてゐる。斯うしたことは

別問題として、例へば登豐昇と言つたやうな字を、自分の雅號の一字に使用せんとするとき、登、昇共にものゝ頂點を示し、發展及び向上の餘地なしなどゝ、センチメンタルにならず、字畫の數に因る吉凶などに迷はず、普通我々が解釋してゐる字義で足りると思ふ。

要するに最全最良にして、ぴつたり自我に合ふたものを擇ぶ可きである。

昨今川柳は黄金時代を展開しようとしてゐる。この際突面坊や木偶の坊の出現を望まない。笑は川柳の一要素ではあるが、東洋豪傑笑ひ、係を抱いた老人の笑ひ、文學者の微苦笑、賣笑婦の笑、ユダヤ人の忍辱の笑、カリホルニヤにある日本人の笑、日支共存の笑など、まことに心の笑はさまゞゝである。

しかし笑は信頼、愛、感謝を主調として笑識に涵養されたものでなければならない。そのほゝゑみこそ人に對し、國に對し唯一の安全弁である。しかるを人々は辛うじて低級な滑稽ものにしがみついて、貧しい笑を求めようとしてゐる。

ある學者は言ふ、ユーモアの有無によつて、個人も國家も、それ等がもづ、文化の程度が、たやすく想像されると。何れも前述の笑識に洗練されたものでなければ嘘だ。

あゝ！セピヤ色だと思つて買つた手袋が、トキ色だつたり、黒縞のつもりでつけた、ネクタイが赤筋であつたりする我々の勘違。墨は黒、血は赤と習慣的に意識し、野山が紅葉しても、青い柿が赤くなつても、さつぱり氣付かない我々達をそれは色盲だと診察してくれるやうな先輩を、私はこの柳壇にもつと餘計に欲しい。雅號などはどうでもいゝ、ものゝ符牒だからと言ふ人があるなら、私はこの世ではその人達と語るまい。

我々の詠まんとする川柳は、我々の觀照する現代があつてこそ嬉しい。そして既往現代未來と連綿として繫がる所がゆかしい。これは洋の東西を問はず、所謂詩の力ではあるまいか、過去に詩のなかつた國民は、人の既往に戀人がなかつたやうな淋しさであらうと、言ふ人があるが私はまだその歳までは行かないが、詩から推して肯定が出來ると思ふ。そこで既成の概念に囚はれず、自身を裏書したやうな本名乃至雅號を以て、川柳眼に映じた種々相を率直に叶露して、純情を示す可きである。

◆水無月句會

◇日時　六月拾六日(土)午後六時半

◇場所　四宮神社々務所
(神戸市電山手線　下山手通五丁目下車北へ半丁)

◇兼題　「重傷」三句

◇會費　卅　錢

(地方作家の出席及投句を歓迎す)

神戸市花隈町九六
川柳雜誌社神戸支部

各地柳壇

川柳雑誌社 六厘坊忌

五月五日　於日本橋倶樂部

天才を抱いて夭折した故六厘坊の二十年忌を日本橋倶樂部に營む。大阪の柳壇をして今日あらしめたのは故六厘坊の力大いに與つて功あるものとして本社は例年忌日の五月十六日前後にこの六厘坊忌を營むのである。席上路郎主幹は故六厘坊を通じて今日の柳界に對する感想を述べられ、川柳の向上を力説され、いつまでも廻轉燒の如き句を作つて滿足してゐる事は、柳界の恨事だと結ばれた

（二柳子記）

路郎、半文錢、炭車、助六、萬よし、貴山、觀月、賀名芽、春公子、孤舟、廻天堂、露斗、泰平、木三、虚白、翠峯、鮎美、枝呂、苦香瓏、文蝶、風柳坊、秋水、幸泉、溪水、不愁、かほる、革郎、琴人、二南、愚陀、亂耽、ひろし、舟々、松壽、石竹、鶴峯、蒼梧樓、悪源太、春陽、山雨樓、一路、松郎、二柳子（參會者）

席題　貧乏　路郎選

貧しいと云ふなかに茶を飲み馴れ　松郎
貧乏は貧乏でよいと子に聞かせ　石竹
傍若無人に貧乏の肌を脱ぎ　二南
貧しいといふ誇りさへ出來てきて　亂耽
血統正しく貧に追はれぬ　愚陀
相思もう貧しいことをかこつなり　不愁
損と知りつゝ定期一ケ月　蒼梧樓
貧乏と別に朝顔咲かす腕　文蝶
貧乏の人柄ばかり賞められる　萬よし
貧乏の中にうなづく男親　ひろし
何一つなくても愛し愛されて　鶴峯
新聞にこの貧乏をのせられて　觀月
掛蒲團重たいと云ふ暮しにて　貴山
言ふまでもない借りるだけ借りてゐる　孤舟
貧しさと別に御飯がふいて來る　露斗
親讓りたゞ徒に貧しけれ　鮎美
貧乏をうたがふほどに肥へてゐる　山雨樓
貧乏へ愛の言葉があるばかり　春陽
洗ひ晒しながらサツパリさせておく　泰平
明りさりの下でいくらか出來上り　舟々
貧乏な中にも掃除行きとゞき　同
貧乏はしても書物は並んで居　琴人
貧乏へよい月もさし花も咲き　同
膳の上さびしくなつて愚痴ながし　革郎
貧乏はしても無心は言ひません　同
放つ矢に貧の一字を射る勿れ　半文錢
貧しさの底に心のときめきて　同
日盛りに母子の下駄がかわいてる　枝呂
貧乏の釘に袴がブラ下がり　同
貧乏でこそあれ伯父は引受ける　同
貧乏はすれど自分の飯を喰ひ　三笑
返す氣で又借りになり借になり　同
貧乏と見られともない愚しさ　同

席題　代理　山雨樓選

質問に困り私は代理ですよい事を一つも聞かぬ代理なり　二柳子
一言に代理もムツとする若さ　露斗
その代理あぐら組まして貰ふなり　秋風
道樂をする代理とは知らずゆき　かほる
今日の事代理無言で歸るなり　石竹
代理人醉ふての上の口をきゝ　春陽
代理で行つてもてたのが悪かつた　二南
代理とは思へぬやうな髭を持ち　春公子
もつともなことも代理は聞かされる　木三
代理人一つわからぬ事が出來　苦香瓏
代理でもこればつかりは困ります　觀月
盃が父の代理で廻つて來　革郎
つゝましく呑むべく呑んで代理去に　愚陀
代理となりて淋しき羽織　路郎
（軸）代理人袴を鍬にして戻り　亂耽
山雨樓

兼題　女車掌　萬よし選

いたわれば女車掌は輕くうけ　文錢
女車掌せめては爪を切つてゐる　松郎
行く先を女車掌に二度聞かれ　翠峰
コンパクト女車掌は無口な子　鮎美
女車掌また鳥平の繪にされる　かほる
あきらめて女車掌で暮します　秋風
盛裝へ女車掌の聲がたち　枝呂
美人車掌噂の樣に消にて行き　悪源太
ステッキにまたけつまづく女車掌　ひろし
女車掌男の膝をもう見飽き　不愁
女車掌鏡を使ふ程に馴れ　二南
誘ひ合うて女車掌は車庫に入り　松壽
明日つぶす桃割結ふも女車掌　三笑
女車掌女らしうに風を避け　清公子
女車掌瞬間的の戀もする　廻天堂
背丸う滿員に立つ女車掌　一路
札束が女車掌へちらと見ゐ　山雨樓
車掌はんなつてまんのかあの御娘が　吟女
女車掌歇ふやうに聲を出し　同
あこがれの都で女車掌なり　秋水
女車掌の膝をすつてる歸りバス　同
行き先きを女車掌は聞き直し　孤舟
パンクして女車掌の目立つこと　同
カーヴの春風車掌は女性也　牛文錢
そこはかとなき女車掌よ　同
(軸)後れ毛を女車掌はかき上げず　萬よし

席題「二人きり」　互選

二人きりとなつて決心にぶるなり　泰平
二人きりでかへる路次あかすぎる　春公子
二人きり火鉢に灰があるばかり　春陽
二人きりとも思へない驚がしさ　秋水

二人きりになつても一度飲直し　溪水
しんみりと話して二人蚊に喰はれ　不愁
知らぬ土地二人きりにて强く生き　貴山
俺が居るのに女淋しがり　秋風
二人きりだつた昔を思ふとき　幸泉
社の事を話して妻と酔ふてゐる　石竹
二人きり男は煙草ばかり吸ひ　廻天堂
二人きりの部屋とは見ゐぬ灯　枝呂
二人では淋しからうと邪魔に來る　悪源太
机と水屋とそして二人きり　翠峰
二人きりにされてそろ〳〵怖く　革郎
ハイ二人きりですとテレるなり　蒼梧樓
二人きり今宵の月は冴ゐて居る　愚陀
二人きりかいと密談やつてくる　二南
二人きり何を話すも嬉しくて　虚白
二人きり心配一つ殖ゐるなり　助六
疱瘡をどつちも見せる二人きり　かほる
一と日の皮肉で默る二人切り　萬よし
二人きり良いお天氣を二度も言ひ　文蝶
二人きり女の方が聞く時間　同
二人きり淋しくなれば喧嘩をし　琴人
粹をきかされもち〳〵と二人きり　同
二人きり二階の狹いことに慣れ　山雨樓
いさかひはだまつてしよふ二人　同
二人居て言はでものこと言ひ　亂耽
たそがれて來たのに氣付く二人　同
二人きりになれば話も別になし　ひろし
二人きり女はつれがほしくなり　同
バラックの二人つきりの雨の音　露斗
なぐさめてやりたい一人泣く一人　同
眠つても二人起きても二人なり　同

二人きりしつぺいなどをし遊び　路郎
又かと思ふ二人きりの飯　同
二人きりへタ刊なげこまれ　同

席題　舊友　互選

まず驚いた舊友色が白うなり　春公子
舊友といふのが留守に上り込み　泰平
舊友はアイスクリーム賣つて居る　風柳坊
絶交さへしたが今ではなつかしく　溪水
舊友のひとりひとりを借り歩き　不愁
御無沙汰を詫びて榮轉知らせて來　秋水
舊友は昔のまゝの帶をしめ　春陽
舊友に着物を貸せば短かすぎ　悪源太
舊友の出世喜こぶ美しさ　炭車
舊友の出世を聞いて氣があせり　幸泉
舊友に逢へばやつぱり遊んで居　虚白
舊友は妻の前をもはゞからず　木三
落ぶれた同士昔を忘れてず　石竹
濡衣を着て舊友は歸るなり　枝呂
でつぷりとした舊友のあとになり　鮎美
舊友とあまりに月給違ふなり　山雨樓
舊友と面目なくも會つている　孤舟
只今と言ふて舊友の子が歸へり　助六
いくらかを子供にもたす舊い友　舟々
舊友に會へば金光教に凝り　萬よし
舊友の大きな聲に思ひ出し　二南
舊友と呑めば五圓でつりが來る　かほる
突つ立つてやア君かには寄りつき　革郎
舊友と貧しき膳を中にして　亂耽
舊友は軍隊式で遠慮せず　翠峰
眞黑な顏で舊友尋れて來　同
舊友は爛冷めばかり呑んで居る　秋風

舊友は案外俺を買かぶり　同
舊友は狭い家へも泊つてき琴人
禿と白髪を見くらべる舊友　同
舊友と久しぶりなるはぢき豆　松郎
舊友の出世へうなづいておく　同

川柳雜誌
神戸支部　五月句會（神戸）
五月拾貳日夕　於四宮神社々務所
楊井二南報

セル着に汗ばむ曇天の夕　初顔の作家數名を混へて參會者廿六名和氣靄々裡に作句に耽る。席上庄萬よし氏の意義ある講演あり。自己紹介に親睦を交す。

戰爭　互選

若旦那戰爭に行く事になり　小蓬
戰爭を外に軍樂隊を聞く　卯生
戰爭はもうこり〳〵と傷をみせ　清公子
二等卒名譽の戰死列んでゐ　一狂
出征を見送る中に松葉杖　東洋鬼
號外に我軍の勝うたがはず　紋太
妹の方が氣になる召集令　直行
戰場へ戀の繃帶とゞくなり　亂耽
戰爭の話笑はすとこもり　嶺月
軍服で來て戰爭の話なり　同
勝ちいくさうつかぶ（ボタン）を外して寢　石竹
覺悟して召集令を村で待ち　契柳
年寄も來て戰爭の話なり　同
戰爭があれば と若い血が躍る　梅雅
戰はたけなはにして腹が空り　同
占領の號外と云ふ走りやう　萬よし
戰爭に行きたい小僧ばかりなり　同
戰爭を一人で勝つたやうに云ひ　素人
戰爭の時に生れた子供です　同
號外屋自分が勝つた樣な顏　同

往診　東洋鬼選

往診にれてゐる筈が起きてゐる　直行
往診が氣になり出した勝手元　卯生
往診の今ではどつちとも言へず　小蓬
往診の二度を近所が聞きにくる　契柳
往診がなだめて歸る八度五分　二南
手を拭いてもう往診に及ぶまい　素生
往診に車夫を走らすものがいり　ひろし
往診へ今ダラスケを呑んだとこ　萬よし
往診の氣輕う歸る日とはなり　紋太
往診を見送つて出て咳一つ　同
（軸）往診へ折の刺身の事も云ひ　東洋鬼

神戸一狂選

延びるだけ延びて神戸は山へ入り　卯生
遊園地混血兒同志遊んでる　完二
神戸着先づ元町をつき抜ける　小蓬
布引の瀧で神戸の汗をふき　嶺月
阪急は摩耶ケーブルを近う見せ　契柳
新開地妻と電車で通り抜け　石竹
支那人は巢の樣にして住んでゐる　素人
歸朝して見れば神戸も變つて居　ひろし
元町の用事踏切二度またぎ　華水
メリケンへ客の荷物が先につき　同
九十折る此處花隈の三味が鳴る　清公子
西神戸所々のネギ畑　同
商館主布引邊に住んでゐる　素生
洋服がゴム靴で出る移民宿　東洋鬼
川崎へバツトくはへて急ぐなり　紋太
喫茶店また喫茶店上筒井　同
獨逸人などを見分けて神戸兒　萬よし
諏訪山で半日暮す模範兵　同
（人）楠公へ水兵無事な顏で來る　亂耽
（人）元町をかたまつて行く印度人　素生
（地）島上は見送りもなく船を待ち　紋太
（天）褒められて神戸の人は窓をあけ　二南
（軸）羅紗賣にロシヤは恐い國と聞き　一狂

專門家　萬よし選

零コンマ零々々と專門家　卯生
專門家それからそれと聞かれて居　千年
專門家心行くまで見て歸り　華水
專門家になればうつかり話されず　石竹
專門家皆んなの說を聞いてゐる　素生
結局は電氣局から來て貰ひ　清公子
その他は何も知らない跪を置き　東洋鬼
專門の他に隨筆なども書け　ひろし
專門家些細な事が氣になつて　小蓬
ほめもせずけなしもしない專門家　同
專門家まだ金のゐることばかり　嶺月
專門家同志話がはづむなり　同
專門家夜中にむくと起き上り　素人
專門家ポケットに手を入れたまゝ　同
專門家內緖話を聞きとがめ　二南
專門家はるばると來た婆なり　同
專門家着々として尺を當て　紋太
要領を得ぬ返事して專門家　同
（軸）專門の話は止せと猪口を吳れ　萬よし

按摩　互選

身の上の話に按摩もみ初め　龍水
尻向に坐つて按摩待つてゐる　完二

座蒲團を按摩さすつて坐るなり　小蓬
天井をむいて按摩はもみ初め　石竹
いゝ道へ出たので按摩吹き續け　嶺月
背廣着て先生と云ふ按摩なり　清公子
按摩の眼見ゐる樣にも思はれる　契柳
按摩にも涼しい部屋とうなづかせ　一狂
按摩二人商賣でない歩きやう　紋太
按摩もう今日の夕刊知つてゐる　直行
按摩にきけば肩もこりまする　亂耽
わが下駄へ按摩他人をよせつけず　同
手を引いてやれば按摩は嬉しがり　二南
哥澤が好きな按摩の男ぶり　東洋鬼
あけにくいすどに按摩の手間をいれ　ひろし
按摩まだ行く所のある道へそれ　華水
按摩さん頭の上から話しかけ　同

兼題　香水　紋太選

若旦那今朝も香水振つてゐる　明華
式場へ香水派手にやつてくる　直行
香水を今日の妹つけてゐる　完二
賣出しの香水の瓶大き過ぎ　重陽子
振り向かす程に香水つけてゐる　耕民
香水の一錢だけがシユツと出る　小蓬
女からもてず香水無駄になり　幸泉
折襟でセーラパンツで匂はせる　清公子
コツテイの香ひ女を思ひ出し　ひろし
香水のそこはかと匂ふ婦人會　琴人
香水に麻痺した樣な男來る　嶺月
香水も順序の樣に散髪屋　素生
香水を小使錢の中で買ひ　契柳
香水の瓶を開けると待つてゐる　悟郎
香水は責任だけの匂ひする　露斗
香水に無視されてゐる運轉手　東洋鬼
香水の瓶を悪友すぐ見付け　萬よし
ネクタイを襲め香水をつけましよか　卯生
嫂の香水を盗み嗅がれて居　同
舶來と聞いて香水御氣に召し　南耕
ハンカチへ安香水のかたがつき　同
香水もふらねばならずタキシード　笑人
痒ゆい子へ蚊取香水つけてやり　同
金ツルを少し香はす女事務　京二
香水を皆んなに見せて空にされ　同
香水を女給かくして出さぬなり　素人
香水を振つて貰ふてゐる若さ　同
香水と葉卷紅茶を啜りつゝ　亂耽
香水に貴婦人戀を守られて　同
香水も忘れずペートヴェンの朝　聞路
香水をお母ん嫌ひなものにする　同

（以下二點句）

夏らしい香水の香が街に吹く　左馬
匂はせてちきに香水ふたをする　小蓬
香水のよしあし鼻がつまつて居　亂耽
香水へ野暮な男になつてゐる　二南
香水の詰忙しさの中にする　契柳
獨り寢に寢間香水と遊んでる　清公子
香水をつける人とは見ぬ晝　東洋鬼
香水を嗅いで透かして未だ買はず　濁水
香水の渦をのがれたバルコニー　ひろし

川柳雜誌社　姫島支部小集（大阪）

水谷鮎美報

題　負け惜み

貧乏が氣樂とぬかす　負け惜み　賀名芽
負け惜み一べんあとへ戻つて來　觀月
負け惜み證據をこれへ出して見よ　同
負け惜みうしろの方で罵られ　鮎美
負け惜みなと考へながら強く云ひ　同
無理だなと考へながら強く云ひ　鮎美
雜巾はまだ負け惜み云ふてゐる　同
父在りし日をくりかへす負け惜み　冷笑
負け惜みよく新町の事を云ひ　同
負け惜み子はヘイヘイと聞いてゐる　同
負け惜みうちも洋服着せたい氣　石竹
今に見ろ云はせて置けと妻に云ひ　同
負け惜みすぐ先代の世はと云ひ　眠聲
負け惜みも一度インヂヤン。直し　同

題　藥瓶

心もち睦へめにのむ藥びん　賀名芽
電車に乘つてから思出す藥びん　同
藥びんりんごと共に置かれたり　觀月
藥びん俺を見捨てるつもりかい　同
藥びんちと神經もてつだつて　鮎美
殺生はやめときなはれ藥びん　同
戀人をさびしくさせた藥びん　冷笑
さびしさは机の上の藥びん　同
藥びんちと云ひ悪い病氣なり　同
藥びんうつかり毋がだまされる　石竹
藥びん醉ふてゐるのが面白し　同
書置の重しとなつた藥びん　同
藥びんかぜでもひいたのか寒く　眠聲
藥局は藥のびんに花をさし　同

題　待ちぼけ

やい〳〵いふて場所取つて置いたのに　賀名芽
まちぼけへ空どんよりと曇つて來　觀月
まちぼけは橋から石を投げてゐる　同
まちぼけの仰げば星が飛んで消へ　鮎美

まちぼけのベンチへマッチ借りられ　同
まちぼけへ女給はしやいで通るなり　同
まちぼけは手摺によつて落つかず　冷笑
まちぼけは電車が着いて振りかへる　同
まちぼけの道頓堀へ足をむけ　同
までど待てどもうれしさの消へざり　石竹
まちぼけはさう〳〵傘をさして去に　同
まちぼけのふと近道を思ひ出し　同
まちぼけは今更寒い風と知り　眠聲
まちぼけへ妾はそんな氣ではない　同

川柳雑誌社　**松江支部句會**（松江）

四月二十五日夜　松丘町二報

兼題　蝶　互選

花盛り蝶は迷ふたやうに逃げ　舟帆
乳母車蝶々がくると立ち上り　舞姫馳
金粉を殘して蝶の指を落ち　町二
草原を駈け巡る犬へ蝶が飛び　穂波
蝶々へつられるやうに追つて行き（高點）舞姫馳
蝶々へ仰向けになる肩車（同）不二綱
以下席題一〇を二時間に作句、所謂高速度吟をやりました。

車　庫　舟帆　選

泥酔を車掌車庫からかつぎ出し　町二
（人）皆車庫へ入れてどこへ車掌出る　不二綱
（地）息づまるやうに車庫から煙を吐き　無鐵砲
（天）車庫の中大きな音で突き當り　不二綱

生　酔　無鐵砲　選

生酔のきつと坐つて座が白け　穂波
生酔へ女房素直に水を汲み　町二
相棒に逢ふて生酔見破られ　舟帆
カフエーへ行く氣生酔誘つて居　三雷波
（人）生酔のいつか禁酒をした男　舞姫馳
（地）生酔の話はもとへまた戻り　町二
（天）生酔の旦那へみんな逆らはず　不二綱

近　眼　華雪　選

帳場から近眼らしい顔を上げ　無鐵砲
當然のやうに近眼前へ寄り　清花坊
（秀）近眼のすれちがつた氣が附かず　町二
（秀）近眼のうつかり梯子踏み外し　大鳥

裁　板　三雷波　選

裁板へ夕日は淡く影を投げ　華雪
裁板に足をとられる慌てやう　町二
裁板へふざけた一人尻かかけ　舞姫馳
裁板へ涙の儘に今日も暮れ　大鳥
裁板で氣の合ふ娘よく話し　無鐵砲
（人）裁板へ皆別々に手が動き　舟帆
（地）裁板をたゞ睨んでゐる裁ち蓬ひ　不二綱
（天）裁板へやつぱり坐る頭痛膏　穂波

蜂　町二　選

恐かつた夢は蜂から逃げおくれ　大鳥
國賓へ蜂は容赦もなく襲ひ　三雷波
蜂がきて日傘でよける乳母車　舞姫馳
驚いて蜂はやつぱり逃げもせず　不二綱
人）遠足をみだして蜂は巣へ戻り　舟帆
（地）氣を附けの姿勢を蜂が飛び廻り　穂波
（天）植木屋は蜂の巣ですと投げ落し　無鐵砲

土　瓶　舞姫馳　選

仕事場を土瓶は空にして出され　無鐵砲
息荒く土瓶の口を離さない　穂波
帶を卷く端へ土瓶がひつかゝり　同
盛會に幹事は土瓶替ゐにくる　大鳥
（人）作事小屋土瓶に酒を忍ばせる　清花坊
（地）提げてゐる土瓶何かに躓つまづき　不二綱
（天）母家から土瓶が這入る板圍ひ　華雪

手　切　金　不二綱　選

手切金吐き出すやうに出してやり　穂波
姉娘のことは知らない手切金　舟帆
手切金世間の話ほどでなし　穂波
（人）手切金思ふ男とそひとげる　穂波
（地）別れない氣へ頭から手切金　町二
（天）手切金不服を云へば損になり　舟帆

庭　清花坊　選

潛り戸でバケツの水がぢとこぼれ　穂波
校庭の廣さを迷ふ暮の色　町二
夜の庭へ裏切るやうに妻一人　無鐵砲
（人）氣晴らしに出てた庭も春の色　舟帆
（地）病上り庭だけ醫者に許される　無鐵砲
（天）お手討に殿は庭下駄はいてくる　不二綱

工　事　大鳥　選

雖一事努力の後へまた崩れ　華雪
工事中ですと無情に通させず　舞姫馳
（人）工事小屋朝からの雨賭になり　町二
（地）工事場今日は不吉と酒がいり　舟帆
（天）見げれば落ちてきさうな工事なり　同

花　嫁　穂波　選

花嫁もいつしか夢のやうに過ぎ　清花坊
花嫁は手持沙汰の日を送り　無鐵砲
花嫁の綻びほどに笑ふなり　町二
（人）花嫁に苦しい生活判つてき　不二綱
（地）花嫁のまだそしられぬ厚化粧　舟帆
（天）花嫁を一寸見てきて惚れてゐる　同

川柳雑誌天満支部

菅公千二十五年祭句會

四月廿五日（大阪）北山悟郎居にて悟郎報

選

繪馬堂　互

繪馬堂で子供は抱いて吳れと云ひ　翠峯
繪馬堂をながめて居れば晴れて來る　壽仙
おみくじを繪馬堂へ來て讀み直し　鮎美
繪馬堂で一枚書いた旅便り　舟々
繪馬堂へ來て白足袋に洒落もなし　亂耽
繪馬堂の下模糊としてもやにくれ　同
繪馬堂に半分影がある日和　同
上向いたなりで繪馬堂拔けるなり　閑路
繪馬堂へ西陽してゐて靜かなり　同
繪馬堂で濡れる仕度をして走り　同
繪馬堂がかげり露店の荷を終ひ　凡平
繪馬堂で且那の事を惡く云ひ　同
孫連れて來た繪馬堂に風があり　同
繪馬堂にいつもの馬鹿がはなを　松郎
繪馬堂に家出してきたやうに居る　同
繪馬堂へ來ると身の上話なり　路郎
繪馬堂へ初手にくるのは仕出しなり　同
繪馬堂の一文菓子に世辭もなし　同

選

下駄箱　互

下駄箱にまで淋しさ殘るなり　凡平
待つてゐるのへ下駄箱の周章やう　孤舟
下駄箱の中にも平和ただよへり　亂耽
下駄箱の一番下に藥びん　鮎美
子が出來てから下駄箱の向きを換へ　かほる
下駄箱に齒入れしたのが見當らず　閑路
下駄箱が一足拔けてたのんで出　同
葉牡丹の鉢下駄箱の上で枯れ　翠峯
下駄箱へ朝の光りがあるばかり　翠峯
下駄箱にもらふた雪駄ほつとかれ　ひろし
下駄箱のあちこちさがす妻の留守　同
下駄箱の中に取柄もなかりけり　松郎
下駄箱のかるゝしさに腹が立ち　同
下駄箱の上に積まれた靴の箱　革郎
下駄箱の横に三輪車もならび　路郎
しみたれたこの下駄箱と共に越し　同

選

菅公　路郎

訪れた春を菅公に淋し過ぎ　陽氣亭
外出の道實公へ雨もよう　凡平
菅公の此お姿にひげが無し　かほる
馬鹿になりきつて道實詩をつくり　松郎
道實に仕へて涙多き日よ　同
（軸）道眞を訪へば只今お手習ひ　路郎

川柳雑誌

平塚支部句會（神奈川縣）

五月十二日於駒人居

選

兼題　紙　駒人

廣告の紙が赤くて子に取られ　花鳥
一片の紙辭令となれば首も飛び　城月
一帖の紙を戴く勝角力　千太
紙背かぶつて子供は滿足し　娛鹿
紙切れに小僧用向きしるし　美知坊
（人）鋏研ぎ紙を濡らして切つて見せ　同
（人）勳功に今更思ふ赤い紙　枝月
（地）紙のべていろは書く手のしほらしさ　香川
（天）病上り一人淋しく紙人形　千太

選

席題　犬　共

仲人の家へも一ツ犬張子　駒人
その犬がさ子供親をつれてくる　娛鹿
吠にられて少年門に立ちすくみ　城月

選

席題　町　共

諸畑ほつ〳〵町になつてゆき　城月
町政を施いて役場も新築し　枝月
町中をまわつて寒行腹がへり　美知坊
町の灯にそむいて二人驛へ來る　駒人

選

席題　飯　共

猫の飯犬が失敬して仕舞い　岡江
明日の飯ないに一合よけい呑み　千太
掻つ込んで帶をしめ〳〵飛んで行く　美知坊
嫁に行く日が近づいて飯もたき　駒人
末ッ子をだましてやつと飯がすみ　同

川柳雑誌社

螢ケ池支部句會（大阪）

安西杏三報

輕いセルにもうつすりと汗のにじむ　五月十二日午後壹時から萬よし先生に毎度の御足勞を願つて句會を開きました。

選

兼題　泣く　萬よし

泣き出すは母竈から聲をかけ　昇二
泣いた事日記帳へは妻付けず　定義
泣き出した子へ伸び上がる水仕事　同
一とし泣きり泣けばうるさくなる女　島村
泣く理由を知らず涙にもろいと云ふ　同
病院を泣き出しそうに母歸り　杏三
泣いてるをいつそ冷たい目で見詰め　同
泣き疲入りしたのか母の歇もやみ　光哉
泣く程の氣にもなれずに拗れてゐる　同
泣のにも上手と下手があるのだろ　同
（軸）涙てふ武器で女のまつしぐら　萬よし
泣けて〳〵と中座から母　同

言譯が旨くなつたと賞められる　杏　三　選
言譯に來たなと知れる顏の色　島村　清志
言譯は紙一枚に書き殘し　霞舟
言譯へ默つて居ればまだしやべり　定義　寂郎
家主もう言譯だけで濟さぬ氣　寂郎
言譯は風呂敷包み持つてゐる　光哉
言譯が立たず孕んで居るのなり　同
言譯へ親爺なか〳〵頑固なり　同
言譯の上手は疊見詰めてゐ　萬よし
言譯のも少し借りる積りなり　同
（軸　言譯のだん〳〵愚痴になつて來る　杏　三　選

席題　犬　互

此犬が千圓ですかと恐入り　定義
資本家に飼ひならされたブルドック　寂郎
塵箱へ犬はつれない雨を知り　霞舟
拾ふて來た犬へ米の値聞かされる　同
ブルドツク交際にくい顏で來る　光哉
投げたのを犬忠實にくわゑて來　同
土佐犬に得意になつて引づられ　杏　三
犬の子にアスファルトなど頼りなし　萬よし
繩張りに近く痔犬强いこと　同　選

席題　佛　互

佛前に申譯ない腹を切り　清志
つまづいたとこで佛に手を合せ　喜留久
佛には隨分世話になりました　寂郎
別々の願ひ地藏も肩が凝り　光哉
この俺も佛になるとは面白し　同
佛前を許された氣になつて立ち　杏　三
會はされぬ顏で佛の前に立ち　同
御佛に伽藍を出たい日の多く　萬よし
佛像は躾むたい樣な顏で立ち　霞舟

川柳雜誌　筬川支部　**たかせ會**（島根縣）

五月四日夜　於幸永居　伊藤綠之助報

兼題　短　氣　綠之助　選

冷靜になれば短氣が恥かしい　雷相
短氣ふと氣のつく頃は遲かりし　幸永
病床へたゞやるせない短氣也　笑太郎
來てみれば短氣なことはしてゐない　綠之助

席題　盛　會　互

盛會へあれだこれだのもめが出來　笑太郎
遲刻して來て盛會へ狹く入り　雷相
盛會を着飾つたのが嬉しがり　綠之助

席題　塵　箱　互

塵箱に下女が拾つた銀煙管　笑太郎
塵箱の中豌豆が芽を伸ばし　綠之助
塵箱へ下女の力が足らぬ也　雷相
塵箱に刑事たかつて腕を組み　幸永

席題　呑　氣　互　選

呑氣にも程があるよと母らしく　幸永
ぶら〳〵と來て呑氣さを見すかされ　雷相
試驗前又買ふて來る十姉妹　同
呑氣さは金を持つた兄があり　綠之助
チト醉ふて女の下駄を履いて去に　同　選

席題　總理大臣　互

お國入り首相の寫眞載せてゐる　幸永
宰相の今日は私人で客に逢ひ　雷相
宰相は金の力を恐れ過ぎ　綠之助
暗殺の夢宰相の寢つかれず　同　選

席題　人　通り　互

人通り犬は踏まれたやうに行き　笑太郎
人通り分けて柩の白さなり　同
人通り姉の日傘が涙手すぎる　綠之助
工場町朝一と時の人通り　同
今拭いた樣に埃りの人通り　雷相
二階から醉ふた眼で見る人通り　同

川柳雜誌　富岡支部　**ゆう蝶十九夜歡迎句會**（山口縣）

兼重白鷗報

室積大會の前夜門司の小幡ゆう蝶下關大津十九夜、兩氏來訪、歡迎會を開く。

忌中札夜明けの風が吹いて居る　銀鷗
諦めた樣に立退く懷手　同
彌次馬について懷手も動き　ゆう蝶
給日傘が大きく避ける懷手　同
繃帶に俥少うしづつ動き　十九夜
帶皮で町をプラック宿浴衣　同
色街に來てから變る皮膚の色　迷洋
懷手おされ〳〵て前に出る　維幾介
仲直りまだ繃帶に血がにじみ　同
ある丈の智慧をしぼつた懷手　竹馬人
色街を過ぎて淋しい街續き　同
看護婦の人事つくした申譯　靜仙
懷手母には嘘の利く男　同
スリッパの看護疲れた草を踏み　白鷗
釣り皮にハッピ大きくゆれるなり　同
繃帶を取卷く方が腹が立ち　同

守口句會（大阪）

五月十日　於京阪沿線守口新水居

朝田新水報

菜種も過ぎ新綠滴る頃守口最初の句會を催す。松郎氏を迎へ兼題披講後各自の面白き餘

興を以て一夜を愉快に過した。

席題　鶏　互選

鶏の聲夢かうつゝに聞流し　笑郎
一番鶏と看經の聲　京郎
親鶏に蛙ぶつゝけられてゐる　翠峯
閑人の退屈と云ふ鶏を見る　新水
畑から隣の鶏へ石つぶて　素人
もう少し飛べる筈だと鶏思ひ　同
鶏羽あそびはぐれて暮れかゝり　双葉子
なんにも知らず肥へるにわとり　赤城
鶏の目にけゞんなる虫がはい　同
時告げたあとはひつそりした母屋　ひろし
鶏屋へ追ふ母の姿の長いかげ　同
失戀へ鶏砂けつて見せ　同
鶏を入れて母屋へ呼びに行き　舟々
風呂からの歸へり鶏追ふて來る　同
今日歸る朝雞小屋へ覗きに來　同
まぢないの話の中に鶏が鳴き　松郎
永生きをして鶏に起こされる　同
一人娘とひよこを育て居たりけり　同

差し向ひ　ひろし選

差し向ひ今度は何に結ひませう　武子
お榊も枯れたまんまに差し向ひ　京郎
差し向ひ白粉燒けが目立つて來　翠峯
差し向ひその冗談が氣にいらす　同
差し向ひ水屋が屆くまでここに　舟々
二階から上つて來いと差し向ひ　同
郊外にまだ親しめぬ差し向ひ　新水
差し向ひ眞劍になる金のこと　同
萬歳の眞似もして見る差し向ひ　同
差し向ひ肘をかくのよく寢るの　素人
差し向ひ亭主叱られ通しなり　同
差し向ひ掃くと矢つ張りほこりが出る　松郎
差し向ひ煙草一本見當らず　同
(軸)差し向ひ時計がまつたまゝであり　ひろし

兼題　石　松郎選

石嚙んでおき乍ら妻だまつてゐる　笑郎
じやまになる積物石と思へども　新水
何になる石か知られど運んで居　舟々
石いれる話で家賃前のまゝ　增峯
つまづいた石が命の親となり　同
石に問ふとも戀は語らじ　京郎
急立ちの重石に妻の甲斐々々し　同
石ころころ冷たいところ溫いところ　翠峯
庭石に對しても母の弱りたる　同
一人づつ自信をもつて石を投げ　赤城
謝りに行く道石にけつまづき　同
つまづいた石に未練は無けれども　武子
石ころも宮居の砂もかはられど　同
結局は一句もよまず石を投げ　同

月二會例會（尼崎）

四月二十一日　木三報

席題　宿替　互選

近所へは方が悪いと轉宅し　文月
引越してまだ落ちつかぬ顏に見る　水郎
宿替の道具の中にもうれる　二女
宿替の子供一かど手傳う氣　吟女
宿替の荷物にもたれすした食べ　同
宿替と云へば家守のそつけなく　木三
引越して子供の多いことと知り　同
末の子の袷となつてやつと這ひ　松郎

席題　袷　互選

初袷しつけを取ればしやんとなり　文月
袷着た娘に帶が氣にかゝり　よし源
縫立ての袷を着せて鯉幟　二水
小包の袷にしては重過ぎる　同
袷縫ふ女へ桃がほころびる　吟女
袷着て見てもなやみに變りなし　同
緣づいた姉の袷の地味なこと　虛白
母娘にて地味の派手のと云ふ袷　同
先戰に捨てし袷のしつけ糸　松郎
折目正しき袷のちりをつまむなり　同

席題　毒婦　互選

まゝならぬ浮世と毒婦氣がつかず　よし源
ものずきが毒婦の酒に醉ふて居る　虛白
子守歌毒婦の胸へしみこんで　吟女
逢ふて見ゞや毒婦と見ぬ眉をふせ　同
初心な娘に毒婦の背筋寒ふなり　松郎
途々も毒婦手下を呼捨ず　同

兼題　影　松郎選

長い影疲れた足について來る　二水
影を消ふ樣に自動車又續き　吉期
釣竿の影に小魚は逃げて行き　文月
失戀の女帆影を淋しう見　同
其の當座影を見るのも嬉しくて　虛白
なつかしの影見せた丸窓なるに　同
ムツとしてもどれば母の影ぼうし　吟女
留守番の自分の影にふとおびへ　同

第拾壹回　蒼梧舍例會

五月十二日　於第一生命大阪支部内

支店長　石川双葉子報

支店長いくらか出來て首になり　晩香
支店長そしらぬ顏で知つてゐる　悪源太

支店長たゞ事なかれ主義に活き　蒼梧樓
支店長あれで氣嫌もあると見は　同
支店長柄相應な判をもち　青柳子
支店長今日は社長の來る日なり　双葉子
履歴書をまあ預かつた　支店長　武藏坊
調査　互選
六ケしい調査に親父腹をたて　江月
調査しに來た役人も同情し　惡源太
調査とは名ばかり山の溫泉にひたり　蒼悟樓
何事も調査〳〵でればらせる　晩香
愛嬌も云はずメートル調べに來　柳河樓
調査役眼鏡を鼻の上にのせ　青柳子
小切手　互選
なんにも云はず吳れる小切手　双葉子
たま〳〵に書く小切手は字がのらず　蒼梧樓
先附はいけぞんざいに廻はされる　同
不渡りはまだ客口にみれんあり　青柳子

劍柳庵小集（神戸）

楊井二南報

題「別莊、爪、小包、木箱、辨當、眼鏡、合鍵、誕生日」

令孃を迎へ別莊夏となり　千年
爪先に器用な踊り見せてゐる　同
小包を解けば子供は納得し　小蓬
本箱をいらつた事が兄に知れ　同
切つた爪恐ろしさうに捨てるなり　同
湯上りのおとなしく爪きらすなり　嶺月
入學に爪の檢査をするも母　同
小包へ三枚目の紙を取り　華水
玄關へドーンと小包音を立て　同
辨當の空で小川へ舟が出來　同
別莊で胡爪のとげを褒めるなり　亂耽
眼鏡をかけて嬉しき便り　同
女なれば灯に爪の色美しき　同
別莊の歸りは涙の音に飽き　二南
別莊へ兄さんと來て物足らず　同
本箱は八燭の灯を淋しがり　同
約束の堅さ小包屆くなり　紋太
合鍵の合ふまでの戸の頑丈さ　同
合鍵をたしかに持つて引受ける　同
誕生日友達をほめ母をほめ　同

糸屋町偶會（大阪）

於舟々居　舟々報

題　青葉

青葉若葉夜行で歸らねばならず　舟々
口笛は遠く若葉に風があり　翠峯
模疑店の赤さ若葉に包まれて　毒仙
信じあふ二人へ若葉ゆれてゐる　赤城
抱車夫若葉隱れに掃いてゐる　松郎

題　夜逃げ

ブラジルへ行こうと思ふ夜逃前　正博
逃夜げ者石につまずく心持　赤城
夜逃げして來たとは見へぬ宿茶なり　毒仙
月が出て夜逃げ方角變へるなり　翠峯
うどん屋へかへしにやつてから夜逃げ　舟々
家主へ夜逃げ長たらしく送り　松郎

駒人居偶會（神奈川縣）

駒人報

五月六日

ぐみの木文藝社の同人、美知坊、城月氏が尋ねて來たので、近所に居る千六氏を迎へて、作句しました。

本箱、親子、行末の三題

本箱に青春の極秘ひそめけり　美智坊
本箱を背にして文士寫つてる　同
分家した息子に草餅持つて行き　同
嫁にだけ遠慮をする母になり　同
行末は職工でない野心持ち　同
行末を阿呆らしく見るモガとモボ　同
母親はお伴のやうに隨ひてゆき　千六
片言の母親だけは判つてる　同
本箱の上でキューピー笑つてる　同
月賦とは知らず本箱ほめられる　同
子澤山行末の氣樂さばかり言ひ　同
カフェーは行末思ふどこでなし　同
あぶないと玩具の汽車を母にむけ　城月
行末を賴まれた乳母死んでゆき　同
刹那主義行末などは先のこと　同
親族會謎の本箱中にすは　同
親の氣も知らずダンスから歸り　駒人
行末は云はず產婆の本を讀み　同
貰い子の末を案じる年となり　同
藥局の本箱處方箋も入れ　同
薄暗い部屋に本箱光つてる　同
本箱の位置が變つて廣く見は　同

名蚊巢會（尼崎市外）

曳白報

私共素人計りの仲間で、此度川柳の會を作りました。皆樣の御指導を仰ぎ研究を續けて行く考へであります。（玄洋）

仲居　互選

仲居部屋蓆の立たぬ不景氣さ　曳白
いきさつを仲居初手から知つて居り　玄洋
勸誘に行けば馴染の仲居が居　喬木
詮議立てすれば子もあり主もあり　漫吟坊
運動會今日は仲居も派手に結ひ　鎌田

朝風呂　互選

朝風呂も沸かして欲しい村に住み　鎌田
朝風呂で昨夕の事が氣にかゝり　漫吟坊
御隱居は朝風呂丈けの日課なり　曳白
年風呂も理想に入れて宿の妻　玄洋
朝風呂の歸り何時もの人に會ひ　喬木

白粉　互選

汐干狩マア仰山に塗つて居る　喬木
白粉の善惡を知る齡となり　鎌田
佛門に入れど白粉捨てられず　同
白粉に浮身をやつす身分なり　曳白
電車中人目おくせぬ刷毛使ひ　漫吟坊
お歸りの頃に白粉すましさき　同
白粉の肌につめたし年四十　玄洋
塗りながら年增つくづく世をかこち　同

問題　互選

問題を叔母た任かして母は去に　鎌田
問題は妻に隱した事がばれ　喬木

月二會例會（尼崎）

五月三日　虛白報

席題　バナナ、　互選

バナナ、賣り兩手を打てば値がきまり　文月
しつかりとバナナを持つて寢てしまい　二水
バナナ、賣り仰山まけて買はさせる　虛白
子が病んでバナナ、戸棚に黑うなり　木三
遠足のカバンにバナナ、入れてやり　同
やうこゝでバナナ、を買へとれだつた　吟女
バナナ、むく子の横顏に針を止め　同
しづ〳〵と令孃バナナ、運ばれる　二竹
こみ入つた話バナナ、を淋しく見　同
バナナ、持たせどさみしい顏をしてゐたり　松耶
好きでこつたバナナ、が重い一七日　同

席題　本降　互選

辻俥本降りと見て腰つよく　虛白
本降りになつたと窓へあきらめる　二水
本降りになつて新柄又出させ　文月
この雨にどこをうろ〳〵して居たの　二竹
本降りとなつて電話をかけ直し　木三
本降りに我を見つめる出前持　松耶
本降りの中に大阪城暮れる　同

兼題　燈明　松耶選

入營に父は燈明上げて居る　虛白
燈明にお賽錢をばあらためる　文月
燈明ぢりゝ夕飯と眼が眉き　二竹
空車鎭守の森に灯が見へる　二氷
流行神イルミネーション程ともり　木三
燈明を見つめて居ればこわくなり　吟女

第六回 南海至誠川柳會

五月十四日　太田朋陽報

天下茶屋集會所に於て例の如く麻生路郎師の川柳に就て引續き六回目の講演を聞き席題「貧乏」「色男」「藥壜」の互選、兼題「男湯」「悠氣」の路郎師の選句發表ありて散會す。次回兼題「引越」「三味線」、期日六月十一日集會所にて。

男湯　路郎先生選

男湯で夕立をきゝ又つかり　明海宇一木
男湯で子供に泳ぎ敎へて見　柳骨
男湯がはづかしくなる十二三　貴山
赤ゝ坊の目方はかりにやつて來る　同
男湯は熟いものだと思つてゐ　同
男湯に剃刀並ぶ日曜日　柳骨
男湯で吸殼水にぬれてゐる　貴山
男湯の相談者い灯を潛ぐる　呑陽
男湯の方へ裸体で追ふてくる　泰平
男湯へ横向いてゐる風呂屋の娘　同
男湯に聞きてありとは氣がつかず　末廣
男湯でペキペキ骨を鳴らしてゐ　多聞
泣いてるを洗ふ男湯しみたれる　同
男湯であいたら石鹼借せと呼び　半田
慰みのやうに男湯流してゐ　多聞
番臺はヂレットの動き見飽いてる　阿形
男湯へ上りを知らす金盥　土井
湯に來れば僕より痩せた者もゐる　阿形
太功記、湯槽の椽を叩いてゐ　泰平
首相より偉い男湯の話　双柳
男湯で世間のせまいことを知り　朝陽
女湯と選ぶとこなし醫しさ　阿形
濟南がどうの斯ふのと男風呂　呑陽
男湯へ朝日の入る心よさ　貴山
ボールバックこわ〳〵赤兒入れに來る　一路
（人）男湯の書は買切りらしく入り　朝陽
（地）男湯へ子供渡して化粧をし　白雨
（天）一切空風呂の中にも湯の加減　阿形

恪氣　路郎先生選

恪氣もあつて中まるくなり　河内
強腰の女房會社へ押しかける　一路
年上の妻の親切裏切つて　瓢箪樓
恪氣する妻へすまない嘘をつき　朔陽
やきもちの氣が夜の街を歩かせる　呑陽
これをなん恪氣とぶとほくそ笑み　飯原
只飲んだ許りで妻は承知せず　同
恪かぬチト匂はせてみたいなり　泰平
あの事も恪氣と知つた淋しい日　柳骨
冗談を本氣にしてる妻弱し　同
電灯の眞下に恪氣のうなじ　多聞
抱いた兒に何やらいふて寢てしまふ　同
生酔で戻り恪氣をうれしがり　同
物言はず開けてくれたは恪氣にて　貴山
生活苦今は恪氣もしてられず　同
よろしくと出された名刺捨てゝに　同
有難く思つてゐるよ其の恪氣　阿形
恪氣する中となりけりいつしかに　同
いゝ亭主あつて不安な日が續き　同
そんな人あなたが好きと横を向き　土井
不意打を食はせて妻を試して見　同
罪の無い電話を妻は聞きたがし　同
私など無ければよいを連發し　同
(人)髪結に亭主の恪氣喋つてゐ　貴山
(地)暗い顔するも恪氣の始めなり　阿形
(天)挨拶が友達らしくないといふ　泰平

色男　互選

身上りの上に一本つけさせる　一路
色男ですよお飲みよお歌ひよ　瓢箪樓
色男花の稽古もしてゐます　貴山
色男もてる程尙氣障な奴　黒天子
色男日の暮れるのを待ち兼れる　朔陽
色男だん〳〵恪くなつて行き　泰平
色男疲せる疲せるとのろけてゐ　路郎
カルピスを飲む手つきさへ色男　同

貧乏　互選

貧乏を見せようもない父が來る　呑陽
まだ餘裕ある證據には質の札　阿形
名人の子は貧乏で暮しつけ　朝陽
貧しさに亦引越しと子は知らず　路郎
新聞も斷れといふ貧しさよ　同
お互に星をいたゞき使はれる　同
疲れきつて歸りや机に講義錄　同

藥壜　互選

女房が包んでくれた藥瓶　呑陽
背の子は藥瓶まで持つといふ　呑風
藥瓶持たせて歸るよい天氣　貴山
藥瓶長い廊下に馴れてゐる　同
キッチリと帶を結んだ藥瓶　多聞
藥瓶別莊の塀の長いこと　同
藥瓶元日だけはしまつとき　朝陽
空壜屋藥瓶だけ置いて行き　樂居
欠席の詫び藥瓶さげて寄り　同
藥瓶に死んだ子供の名がのこり　同

萬よし偶會（大阪）

四月三日　萬よし報

散歩

何事も言はず散歩に出るときめ　革郎
散歩から歸へればいつも二時三時　敏子
ハモニカが散歩に欲しい春の宵　小万よし
目的は只陽を浴びる杖を振り　万よし
ステッキがくらげの脊にたわむ　佳山
月が出を見付け散歩の氣が變り　睡花
眞實のとこを散歩は聞いて來る　明烏
散歩から戻つて部屋の灯をともし　素生
兄さんのやうな氣持で散歩する　亂耽

青年團（三月二十五日）

青年團らしくないのが幹事なり　妙見堂
カフェーの話しで登る青年團　加香
青年團喧嘩の出來ぬ服を着る　二南
青年團夜警をさぼる奴が出來　亂耽
青年團へ反感のある父を持ち　同
青年團色の白いが後になり　かほる
團長を中に相談出來上り　一柳子
團助茶代青年團の數　万よし
青年團中座の前を駈け拔ける　同
のつぽんに又用がある青年團　馬行
厚司とは氣分の違ふ青年團　同
青年團兄弟らしく背が違ひ　同

川柳雜誌社京都支部　創立句會（京都）

五月六日　圓山公園の「あげぼの」に於て

京都支部創立大會を開催、出席者、路郎、松郎、二柳子、ひろし、萬よし、素人、朝陽、三笑、加香、亂耽、舟々、赤城、翠峯、新水、双葉子、源坊、廻天堂、赤埴、文錢、松窓、六好、綠期、秀巒、東人、壽郎、光風

無折、不滅、紫明、樂山、千枝、紅楓、凡骨の諸氏と私の三十四名、京都では近頃稀に見ゝ顔ぶれであつた。支部幹事として簡單な挨拶をして路郎主幹より「京都と川柳、是からの川柳」と言つた、御講演あり。最後に葉櫻の下に記念撮影をなし盛會裡に散會、時に十一時。

（京郎報）

兼題　仲　居　　路郎選

仲居頭挨拶に來て片付ける　松郎
わが寢間へ淋しくも仲居醉ひ　舟々
年きけば仲居笑つて席を立ち　源坊
遠出して仲居の欠伸續くなり　萬よし
そんな譯でとかく仲居が續かない　素人
隙が入る仲居あちらの間でしやべり　不滅
婿はんがあります仲居ひらけすぎ　文錢
春宵一刻仲居の褄の切れること　樂山
我にかへれば又明日のある仲居　二南
同情の序に仲居酌いで置き　同
仲居もう堅氣〳〵が口につき　翠峯
もう一度仲居になつて貯める氣の　同
仲居たゞ飲けない事にして呑まず　紫明
丸髷の客を仲居は憎くゝ見る　同
（人）二人だまして仲居くたびれる　赤城
（地）にぎられた手をはなそうと仲居　光風
（天）すき燒きのにほひに仲居ねいなま　翠峯

席題　急　用　　松郎選

急用は道でゆつくり考へる　翠峯
急用と聞いて煙草をのみ直し　紅楓
急用に母の用意が間に合ふて　三笑
急用へ社長の髯が浮びけり　亂耽
近道を行つて急用ふみかぶり　千枝
急用といふのに松魚けづりかけ　路郎
（人）急用は一番前に乘つて居る　素人
（地）急用を女は不思議そうに聞き　不滅
（天）急用へ惣の雫む足へ落ち　絲郎

席題　針　　窓選

針持つて暮す以外に噂され　文錢
姉妹の針を各々まちがへず　亂耽
晩餐の向ふに針を見つけたり　赤城
嚴かに針の仕末を御寮人　萬よし
針の數よんで産着を縫ふて居り　東人
姑に針の落ちてるのを見られ　二柳子
姑の眼に一本の針の先　樂山
立上る針は敷居を越へて落ち　六好
初奉公ひと針縫へば鐘が鳴り　松郎
針箱の枕のそれし世帶也　千枝
針の小言も云はぬ姑　路郎
針折つた娘思案を變へて立ち　翠峯
天窓の下で母親縫ひつゞけ　同
（人）その針を少し崩れた髮へさし　廻天堂
（地）黑朱子の尖りに針に世帶浸み　六好
（天）針と共に嫁の心の錆びてゆく　路郎

席題　正　直　　千枝選

正直の頭に宿る貧乏神　素人
いつも丸刈で來る正直者　赤城
正直な子供はつきり返事をし　翠峯
正直な笑ふてやうなと口を添へ　加香
正直な男にされて金がなし　光風
正直に言ふに子供は叱られる　源坊
正直なお方にされて醉ふて居る　ひろし
正直にしてれば汽車に乘り遲れ　廻天堂
正直の朝の雜布二度絞り　不滅
正直の外に取りへもなく禿げる　樂山
正直なところ一ぺん顏を拭き　秀巒
正直に話せと椅子を近く寄せ　同
正直の膝にひき茶がこぼれたり　亂耽
正直の時計の言ふが儘になり　同
只正直に生きている無精髭　柴明
其儘に子供はかどへふれて來る　同
出し拔けば正直者に詫やまられ　松郎
正直を女將にだけに買はれて居　路郎
（人）正直に働いて居て首になり　素人
（地）正直と別に通の古びやう　翠峯
（天）正直なだけにさびしい人にまれ　路郎

席題　葉　櫻　　互選

葉櫻へ脫いだ足袋から草疲れる　綠郎
葉櫻の下で遠乘り風を入れ　双葉子
葉櫻に見合の影がゆれてゐる　新水
葉櫻へバラソル疲れ切つて着き　舟々
葉櫻に不動明王包まれて　亂耽
葉櫻に娘のセルの短かくて　三笑
葉櫻の頃にしようと病上り　加香
葉櫻へよればサイダー賣りに來る　廻天堂
葉櫻へ尻をからげた母を連れ　萬よし
葉櫻に都の人は落ちついて　紅楓
葉櫻の校舍ピアノにたそがれる　ひろし
葉櫻へ來て圓山は狹く見へ　二柳子
葉櫻を藝者もうよいことにする　不滅
葉櫻へ儲けそこれた儘の茶屋　柴明
葉櫻に又呑みかへす友に逢ひ　千枝
葉櫻の下父の墓母の墓　素人
葉櫻に女ごゝろの滅びたり　京郎
葉櫻になつてお寺もたゞの寺　路郎

編輯後記

▼月並なことは言はない。然し本當のことは書きたい。川柳雜誌が川柳の社會進出を目的として生れて以來もう四年半になる昨日創刊號を開いて見て隔世の感に打たれた。路郎主幹其他の方々の努力の跡がまざ〳〵と感じられる。今後川柳雜誌がどんなに大きく伸びて行くか、それは自分にも分らない。が然し川柳の社會進出の目的だけは是が非でも遂げる決心だ。それが一日早やければ、一日早いだけ日本は救はれるのである。

▼一人の力は小さい、然しそれが團結した時には大きな力となる。個々別々の努力は効果が薄いことは毛利元就公の故事を引くまでもない。寄稿家並に讀者諸彦が我々の目的を御賛同下され絶えず御援助を賜つたことに感泣する。この御援助なかりせば川柳雜誌は今日あることは到底不可能事に屬すると思ふ。今後の發展にも寄稿家並に讀者諸彦の御力を大いに借らなければならぬと思ふ此際切に御援助を希望する川柳家諸君團結は力だ

▼今月も原稿が輻輳して次號廻しにすべく餘儀なくされた玉稿が多い、全部を掲載したならば現在の頁數を三倍にしても足りない、遺憾ながら割愛した。路郎主幹のものなどは全部遠慮して頂いて僅かに川柳漫畫「人の一生」だけを掲載した。

▼社友長谷川一徹氏は今回大阪市南區長堀橋筋一丁目高島屋前に「和漢洋醫院」（電話南四一八八）を開業され、藥價一日分一圓均一で呼吸器病及び消化器病を專門に診療されてゐます。

▼社友喜田飯山氏は五月十三日男子を儲けられ正雄と命名さる

▼社友安井ろひし君は五月十五日大津へ行き石山に一泊琵琶湖巡りをされた。

▼社友岩崎柳路氏は靜岡から甲府市地方へ旅行された。

▼社友高見柳骨氏は岡山市主催の日本勸業博覽會を見物に行かれた。句あり「本舘は素通り出來ぬものばかり」

▼社友橋本二柳子氏は六日京都支部句會に出張され。當夜は同地に一泊。翌日嵐山方面へ廻遊された。

▼松江支部幹事松丘町二氏から松江高等學校内に淞高川柳會が近い將來に創立される氣運に向つ　この通信がありました。

▼秋風、秋水、風柳坊、曼平、幸泉、銀波其他の諸氏が中心となり北濱に本社支部を設立されることになり、六月早々創立句會を催される筈です。

▼尼崎市外長洲の三川義三氏は名蚊巣川柳會を創立され六月から塚崎松郎氏が出張されることになつてゐます、祈發展

▼舟々、新水、翠峰三氏は高知地方へ旅行され高知支部濁水氏の案内で同地の見物をした。

▼屏三呂氏は四月の三日に日本ラインを探勝された。

▼柴田吟月氏は今度大阪市南區周防町心齋橋筋東へ入るに「カフエー毎日」を開業されました

▼中川眼隧子は七月に柳友二ニ氏と共に來阪されるとの御通知がありました。

▼月二會幹事竹本二竹氏は四月廿七日令孃亮子さん（四つ）を逝くされました謹しんで哀悼の意を表します。

▼本社賛助員岸岡角方氏は五月十六日午後八時四十分大阪驛發十八日横濱出帆の汽船で渡米、半ヶ年の豫定で歐米各國を視察されます。

▼本社賛助員長崎柳秀氏も今秋大阪醫科大學より歐米各國へ洋行を命ぜらるゝ事に内定してゐます。

▼螢ヶ池支部の爲に盡力された德井聖子氏は四月廿四日永眠されました。謹しんで哀悼します

▼金澤柳界の花たり〻柳誌「百萬石」が復活され金澤市愛町一丁目百萬石川柳社から發行さる

▼吉川啞人氏は柳誌あらしを出されました。

▼松郎、馬行、春魚、刀三、莢豆の五氏は今回「使命會」なる結社を作り、川柳の指導啓發を行なひ、句集を發行されることになりました、會費は一ヶ月五十錢さのことです、健實に發展されん事を祈ります、（革郎記）

改號と移轉

▼高松綠之助氏は「伊藤綠之助」と改姓された。

▼河野春三氏は「春魚」と改號

▼平塚支部笹舟氏「千六」と改號

▼田中三平氏は大阪市住吉區天王寺町一七六九へ移轉

▼清水虚白氏は尼崎市大物村住友社宅甲號へ移轉

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の郵紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第五卷第八號課題

六月五日締切
（各題十句以内）

▼丸髷　前田雀郎選

▼居眠り　麻生葭乃選

▼錠前　河野春魚　中野柳陽　共選

第五卷第九號課題

七月五日締切
（各題十句以内）

▼魚釣　篠原春雨選

▼唇　大島濤明選

▼看護婦　青砥不二綱　安井ひろし　共選

毎號募集

▼近作柳樽（廿句迄）麻生路郎選

▼古句質疑（三句迄）蛭子省二擔當

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號　一部　金參拾錢
新春特輯號　一部　金五拾錢
八月特輯號　金四壹圓八拾錢
半年前金（特輯號共）壹圓六拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座穴阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

第五卷第六號
（毎月一回一日發行）

昭和三年五月廿五日印刷
昭和三年六月一日發行

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替穴阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房　其他市内各書店
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤（函館）石塚
（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅

川柳雜誌社關係の人々

（いろは順）

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純一　田中辰二　田中香涯　長崎柳秀　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　小酒井不木　赤井清司　末弘嚴太郎　小出楢重　亀井花童子　木村半文錢　横田眠聲　柴谷柴舟　高橋かほる　高見柳骨　竹内多聞　森東魚　矢田右大臣　松本助六　松盛琴人　藤里藤園　岩本素人　岩崎柳路　原史風　西本三笑　喜田飯山　北山悟郎　太田朝陽　川合舟々

客員

伊藤彦造　篠原春雨　西原柳雨　蛭子省二　大島濤明　岡田三面子　川上三太郎　川村花菱　吉岡鳥平　吉田清　武笠山椒　德田双柳　安川久流美　前田雀郎

特別社友

萬よし

維持社友

猪野燕柳　石川双葉　長谷川一徹　朝田新水　越村加香　松丘町二　安西杏三　畑田炭車　本田柳一路　水田黄彩　水谷鮎美　森田笑太郎　檜山千代二　高橋緑郎　兼重白鷗　嶋田翠峯　辻左馬　中川眼隱子　中野柳陽　中澤濁水　中見光路　中島鐵洲　桑原京郎　桑島文緑　楊柳川二洲　南馬主幹　麻生路郎

編輯局（特別社友）

橋本二柳子　麻生葭乃　三好革郎　安井ひろし

大阪市南區新戎橋南詰　道頓堀支部　幹事　庄萬よし

大阪市北區北森町三十二　天滿支部　幹事　北山悟郎

大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七　濱寺支部　幹事　太田朝陽

神戸市花隈町九六　神戸支部　幹事　楊井二南

山口縣山口町石原小路　山口支部　幹事　柳川洲馬

東京市外杉並町高圓寺八二三　東京支部　幹事　岩崎柳路

函館市青柳町五〇　函館支部　幹事　龜井花童子

大阪市住吉區安立町五丁目　住吉支部　幹事　德田双柳

朝鮮仁川仲町一丁目八　仁川支部　幹事　矢田右大臣

松江市外川津野津方　松江支部　幹事　松丘町二

石川縣輪島町鳳至上町　輪島支部　幹事　桑島文緑

石川縣小松町猫橋詰　小松支部　幹事　本田柳一路

高知市木與力町　高知支部　幹事　中澤濁水

大阪市西淀川區姫島町五二一　姫島支部　幹事　横田眠聲

大阪市外阪急沿線刀根山療養所内　螢ヶ池支部　幹事　安西杏三

金澤市八幡町五三　金澤支部　幹事　中川眼隱子

大阪市東區糸屋町二丁目七　糸屋町支部　幹事　川合舟々

和歌山縣田邊町幽靈松下　田邊支部　幹事　辻左馬

島根縣簸川郡今市町本町　簸川支部　幹事　森田笑太郎

豐橋市旭町　豐橋支部　幹事　高橋緑郎

神奈川縣平塚町旭座前　平塚支部　幹事　酒井駒人

兵庫縣加古川町大川町　加古川支部　幹事　水田黄彩

青森市古川町美法二七　青森支部　幹事　喜田飯山

京都市七條大宮東入　京都支部　幹事　桑原京郎

山口縣都濃郡富岡村上野　富岡支部　幹事　兼重白鷗

鳥取市川端町一丁目　鳥取支部　幹事　中島鐵洲

讀書子に告へ

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾册か求めるうちには幾册かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリと合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

洋裝美本　全一册

定價　五十錢　郵稅　二錢

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話　南　五六二番

清酒

白鶴を飲む同朋がなつかしい

滿洲へ積む白鶴の樽の數

攝津灘

嘉納合名會社釀

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

川柳とは何ぞや——の數萬言を聽くよりも本書を繙け！
實に愉快に、而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博したる川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により收錄したるもの——。

日月は輝く

「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの——。

大衆と共に

「講談倶樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの——。

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

定價 壹圓（送料拾錢）

發行所 大阪市西成區千本通五の七 不朽洞

振替大阪五二五八五番

實に氣持のいゝ本だと云はれてゐますのでよろこんでゐます。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。（霞乃）

二版出づ

品切にならぬうち
至急御註文下さい

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和三年五月二十五日印刷納本（毎月一回一日發行）
昭和三年六月一日發行

川柳雜誌（第五十三號）定價參拾錢

人氣湧く「湧く斯界の寵兒

貝印内外レコード

六月新譜の中から

映畫劇 笹川繁藏（サック入三枚）

松本泰輔

小池春枝

宮部千代子

（寫眞は吹込室の松本泰輔）

内外蓄音器商會 社會資合

阪神沿線今津町